博士＜臨床心理学＞論文

子どもの社会性発達における母子相互作用の役割に関する研究

－共同的関わりと共制御の観点にもとづく分析－

2014 年 3 月

清水光弘

川崎医療福祉大学大学院

目　次

全体の構成　1

第 1 章　序論
- 第 1 節　母子相互作用に関する臨床心理学的問題　3
- 第 2 節　子どもの社会性発達　4
- 第 3 節　自己制御の発達　5
- 第 4 節　自己制御と母子相互作用との関連　6
- 第 5 節　母子相互作用と子どもの発達との関連　7
- 第 6 節　母子相互作用の特徴を表す諸概念　10
- 第 7 節　母子相互作用の測定方法　14
- 第 8 節　研究目的　16

第 2 章　研究 1：母子相互作用の共同的関わりの視点による分析
- 研究 1 の構成と目的　18
- 観察 1：共同的関わりの分析法の検討　20
- 観察 2：共同的関わりの縦断的マイクロ分析　24
- 観察 3:母子間の相互応答性に注目した共同的関わりの分析　35
- 研究 1 の総合考察　41

第 3 章　研究 2：母子の位置取りと母子相互作用との関連
－子どもの遊びの発達水準と相互応答性による分析－　43

第 4 章　総合考察
- 第 1 節　母子相互作用の発達　52
- 第 2 節　母子相互作用と子どもの社会性発達との関連　53
- 第 3 節　母子相互作用と社会性発達に関する臨床心理学的問題　54
- 第 4 節　自己制御の理論にもとづく発達支援　56
- 第 5 節　母親に焦点を当てた子どもの社会性発達への支援　59
- 第 6 節　本研究の意義と課題　62

引用文献　64

付録　75

謝辞

全体の構成

子どもの発達を支える最も重要な他者は母親である。子どもと母親との関係がどのような状態にあるのかということは，子どもの発達にとって極めて大きな意味をもつことは，定型的な発達を示す乳幼児期の母子相互作用の研究によって明らかにされている。本研究の目的は，乳幼児期の母子相互作用研究から得られた結果を，子どもの発達支援と臨床心理学的問題を示す母子に対する支援に活用することである。

そのために，序論において，子どもは他者との関わりにおいて発達するという観点から，子どもの発達を社会性発達の側面から捉え，社会性発達と関連する母子相互作用に関する問題を議論する。はじめに，子どもの発達における社会性発達の重要性と，社会性発達の基盤となる自己制御について述べる。それに続いて，自己制御の発達過程を説明し，その過程おいて母子相互作用が果たす役割を述べる。そのとき，母子相互作用と自己制御とをつなぐ概念として，共制御（coregulation）（Conway & Stifter，2012）を提起する。そのことから，社会性発達を論じるときに，母子相互作用の発達過程を明らかにすることの意義を示す。そして，この意義を示す前提として，母子相互作用の適切な測定方法を述べる。さらに，母子相互作用，および，母子関係に関する臨床心理学的問題に関する研究を概観する。このことによって，母子相互作用が子どもの発達にとって重要であることがより明確になるであろう。

研究 1 において，相互作用の発達を共同的関わり（joint engagement）（Adamson，1996；Bakeman & Adamson，1984；大藪，2004）の視点から分析する。そのことをとおして，子どもの発達的変化だけではなく，従来の研究では分析されていない母親の行動の継時的変化についても明らかにすることを目指す。はじめに，共同的関わりの特徴を明確にするために，相互作用に適した測定方法に関して検討する。2 者間の相互作用を分析する場合，個人の行動の分析とは異なる方法が必要になるからである（Bakeman & Gottman，1997；Bakeman & Quera，2011）。子ども，とりわけ乳幼児の発達の特徴は，子ども個人を対象にするのではなく，母親[注1]との関係の中でこそ明らかになる（Schaffer，1999）。共同的関わりは 2 者間の状態を示す概念であり，発達の指標として極めて適したものであると考えら

注 1　本論文で用いる「母親」という用語は，その子どもにとっての生物学的上の母親を限定的に称しているのではなく，主たる養育者のことをさしている。

れる。続いて，定型的な養育環境に育つ子どもと，問題を有する養育環境に育つ子どもとを対象とし，共同的関わりの比較を行なうことによって，相互作用が子どもの発達に与える影響を考察する。さらに，母子間の相互応答性に着目して，相互作用の発達的変化を分析する。

母子相互作用は，子どもの言語発達や認知発達と関連することが多くの研究によって示されている（概説として；Tomasello，1999）。子どもの遊びの水準は，母子が玩具に対する注意を共有しているかしていないかで異なることが示されている（Bigelow, MacLean, & Proctor，2004）。研究 2 では，研究 1 において得られた相互作用中の母子の位置取りの意義を，相互作用と相互応答性，および，子どもの遊びの発達水準との関連から検討する。

自己制御の達成は，幼児期における重要な発達課題であり（Kochanska, Coy, & Murray, 2001），それまでの発達が適切であったかどうかの帰結としての意味をもつと考えられる。研究 1 と 2 から得られた結果を用いて，乳児期から幼児期初期（toddler 期）までの母子相互作用と，幼児期中期から後期における子どもの社会性発達との連続していることを，社会性発達の基盤となる自己制御の発達の観点から考察する。そして, この考察にもとづき, 子どもの発達支援と不調和な母子相互作用を改善する支援法を提起する。

第 1 章　序論[注 2]

第 1 節　母子相互作用に関する臨床心理学的問題

子どもは初めから社会的世界に組み込まれていて，他者がいなければ生きていけない存在として，この世に生を受ける（Schaffer，1984）。子どもに関するこの理解は，子どもは生まれたときから社会的存在であり，発達とは自分より知識が豊富な大人からの支えを得ながら，自ら積極的に外界と関わりをもつことによって，自分が属する社会に適応的に参加していく過程であることを示している。幼い子どもにとって，最も重要な他者は母親である。したがって，子どもと母親との関係がどのような状態にあるのかということは，子どもの発達にとって極めて大きな意味をもつ。

Stern（1971）と Trevarthen（1979）は，乳児であっても母親とのやりとりの形成に対して主体的に関与していることを明らかにした。すなわち，母子間の調和した相互作用は，母子双方の相手に対する反応によって成立しているという。しかし，乳幼児期においては，子どもの能力上の制約のために，相互作用の展開を調整する役割は主に母親の側にある（Adamson, Bakeman, & Deckner，2004）。母親が果たすこの役割には，社会的随伴性，応答性，適切性などがあり，それらは子どもの健全な認知発達を促進する（Dunham & Dunham, 1990；Pomerleau, Scuccimarri, & Malcuit，2003）。

これとは対照的に，親側の役割が不適切に実行されている極端な例を，虐待親の子どもへの関わりにみることができる。Cerezo & D’Ocon（1999）や Milner（2003）は，虐待親は，子どもは素直でない行動をすると予期しているために，騒ぎ立てるといった好ましくない行動に対して選択的に反応し，叱責することが多く，その結果，子どもの好ましくない行動は強化され，親子間のやりとりは次第に威圧的となるという結果を示した。

母子間のやりとりにおける母親の役割の重要性は間違いのないことではあっても，これを双方向的に捉えるという観点（Schaffer，1999）からは，不調和な相互作用の要因として子どもの特性についても考慮する必要性が不可欠となる。乳児期から幼児期の移行期には，

注 2　この序論は,「幼児期における Effortful Control と実行機能の発達（第 76 回日本心理学会，2012a）」,「幼児期における社会適応のつまずきへの支援－自己制御の観点からの考察－（川崎医療福祉大学附属心理・教育相談室年報，2012b，vol.8）」において，報告，発表した内容にもとづいている。

運動，認知，そして言語の発達が顕著である。それらの発達を背景として，この時期の子どもは反抗，かんしゃく，攻撃行動，分離不安などの，親にとって対応の難しい行動を示すようになる（Crowell, Feldman, & Ginsberg，1988）。ほとんどの親はこの困難な状況を乗り越えていく一方で，一部の母親にとっては，その後の母子関係に不調のきっかけになる場合もある（Rosenblum，2004）。

子どもは発達初期に経験した母子相互作用の記憶にもとづいて，相互作用の表象を構築する（Stern-Bruschweiler & Stern，1989）。この考えにもとづいて，Stern（1995）は乳幼児と母親との関係性を詳細に論じ，母親との相互作用の体験によって形成される表象のひとつに Bowlby の内的作業モデルをあげている。内的作業モデルとは，愛着対象について，母子間のコミュニケーションや行動の仕方について，そして，愛着対象と相互作用を行なう自己についての心的な表象モデルである（Bowlby，1988）。内的作業モデルが子どもだけではなく，成人の対人関係のあり方や人生に対しても大きく影響することを，Wallin（2007）は，成人の精神療法の経験にもとづいて主張している。すなわち，前言語的体験に基礎をもつ内的作業モデルは発達途上にある自己の基礎を構成し，それが成人期の精神的安定に寄与しているという。

これらのことから，定型的な発達を示す乳幼児期の母子相互作用を研究することは，臨床心理学的問題を示す母子に対する支援の議論において, 有意義であるといえるであろう。子どもは他者との関わりにおいて発達するという観点から，次節以降では，子どもの発達を社会性発達の側面から捉え, 社会性発達と関連する母子相互作用に関する問題を述べる。

第 2 節　子どもの社会性発達

発達にとって，他者との関わりは不可欠なものであるとみなしたとき，子どもの発達は社会性発達と密接に重なることになる。そして，この過程に問題が生じた場合，子どもの発達は適切に進展しないと考えられる。

保育士を対象として実施された調査（藤崎・木原，2010）では，子どもの発達に生じる問題を「気になる問題」として捉えている。それによると，保育士が担当する子どもについて,「気になる問題」を感じた年齢とその問題は以下のとおりであった：0〜2 歳児においては運動発達，言語発達であり，3 歳児では，ことばでのやり取りが続かないことと，落ち着きのなさであり，4，5 歳児では乱暴，落ち着きのなさであった。この結果は，3 歳以降において，社会性発達に関する行動が主要な問題であることを示している。

社会的な基準に従って行動し，自己の行動を制御する能力は，幼児期における発達と社会化の特徴である（Kochanska et al.，2001）。この自己制御とは，自己の情動と行動を制御することに関する多様な側面，たとえば，満足遅延，抑制制御，注意の持続を意味する概念である（McCabe, Cunnington, & Brooks-Gunn, 2004）。社会に適応的に参加するという観点から藤原・木原（2010）の結果を見ると，3 歳以降における自己制御の果たす役割の重要性を理解することができる。

3 歳以降に問題とされている行動特徴は，外在化問題行動とよばれるものに該当する。これは, 年齢相応に衝動性の統制がうまくできないために生じる行動を指す（菅原, 2003）。そして，自己制御の発達が子どもの社会性発達において重要な役割を果たしていることを多くの研究が明らかにしている。たとえば，外在化問題行動と自己制御の程度には負の相関があり（Eisenberg, Cumberland, Spinrad, Fabes, Shepard, Reiser, Murhy, Losoya, & Guthrie, 2001；Mezzacappa, Kindlon, & Earls, 1999；Olson, Sameroff, Kerr, Lopez, & Wellman, 2005），自己制御の高い子どもは，低い子どもよりも社会的に適切で向社会的な行動を示す（Eisenberg, Fabes, Shepard, Murphy, Guthrie, Jones, Friedman, Poulin, & Maszk，1997; 大内・長尾・櫻井，2008）。さらに，幼児期に示される外在化問題行動は学童期にもつながり（菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井，1999），幼児期の自己制御は成人期における社会認知的有能性を予測する（Ayduk, Mendoza-Denton, Moschel, & Downey，2000）。

これらの結果から，子どもの社会性発達にとって自己制御の発達が極めて重要な役割を果たしていることがわかる。自己制御機能の発達を基盤として，幼児は，自己の感情や欲求を表出するためには，それに相応しい種類，強度，そして，状況があることを理解し，社会的に望ましいとされる行動を選択的に表出するようになると考えられる。

第 3 節　自己制御の発達

このように, 社会性発達と密接な関連のある自己制御の発達過程について, Kopp（1982）は以下のようにまとめている。子どもは 1 歳から 2 歳の間に，言語の出現，心的緊張を緩和させる方法の発達，そして，子どもの要求と個性に対する養育者の感受性の助けによって，衝動を統制できるようになり，そして，3 歳から 4 歳になると，養育者という外的な監視が不在の場合であっても，他者の要望に従い，適切に行動できるようになる。

このような自己制御の様相の発達的な変化の特徴を，Eisenberg，Eggum，Sallquist，& Edwards（2010）が的確にまとめている。すなわち，自己制御には reactive な過程と effortful

な過程の 2 側面がある。前者は随意性に乏しく，外的刺激によって誘発される過程であり，後者は意図的に統制される過程である。そして，前者は乳児期から出現し，後者は幼児期を通して発達する。Posner & Rothbart（2007）が描写する以下の発達的変化は，reactive から effortful への移行とはどのような現象であるのかを，わかりやすく示している：

> 生後 3 か月から 6 か月の乳児は，嫌悪の感情を生起させる刺激を提示されたとき，自らそれへの注意を解放することができない。苦悩の状態を改善するためには，大人が別の刺激に注意を向けさせて，乳児の気を紛らわせる必要がある。そして，1 歳前後になると，より能動的な自己なだめが見られるようになる。

reactive な側面を議論あるいは記述するとき，養育者の存在と子どもとの相互作用が不可欠の要件となる。

一方，effortful な側面の場合，それは子どもがもっている能力として測定されている（Kochanska, Murray, & Harlan，2000；Liew，2012；森口，2012）。これらの研究では，子どもは 3 歳から 5 歳にかけて，直接的な反応を促す刺激に対する優位な反応を抑え，課題で求められる反応，すなわち，非優位な反応を実行するようになるという結果が得られている。このような認知的能力の発達は，子どもが目標を達成するために情動を統制し，そして，情動的覚醒を状況に適切な強度に調節できるようになるかどうかにつながる（Shaffer, 2008）。社会性発達と直接的な関連のある自己制御はこの effortful な側面である。

自己制御は気質の因子のひとつとみなされている（Rothbart & Bates，2006）。したがって，自己制御は年齢に伴って向上するが，個人間の程度の差は維持されると考えられる。清水（2012a）による自己制御課題での成績の発達軌跡の結果は，自己制御が気質であることを示している（Figure 1）。対象となった年齢（3 歳 6 か月から 4 歳 6 か月）において，実行機能課題（Stroop 課題，Tapping 課題）と言語能力課題（PVT）の成績は加齢とともに向上している。それに対して，自己制御課題（平均台課題，分類課題）の成績にはそのような向上はない。この結果は，この年齢範囲において，自己制御の力は年齢とは関係がなく，個人差として捉える方が適切であるということを示している。

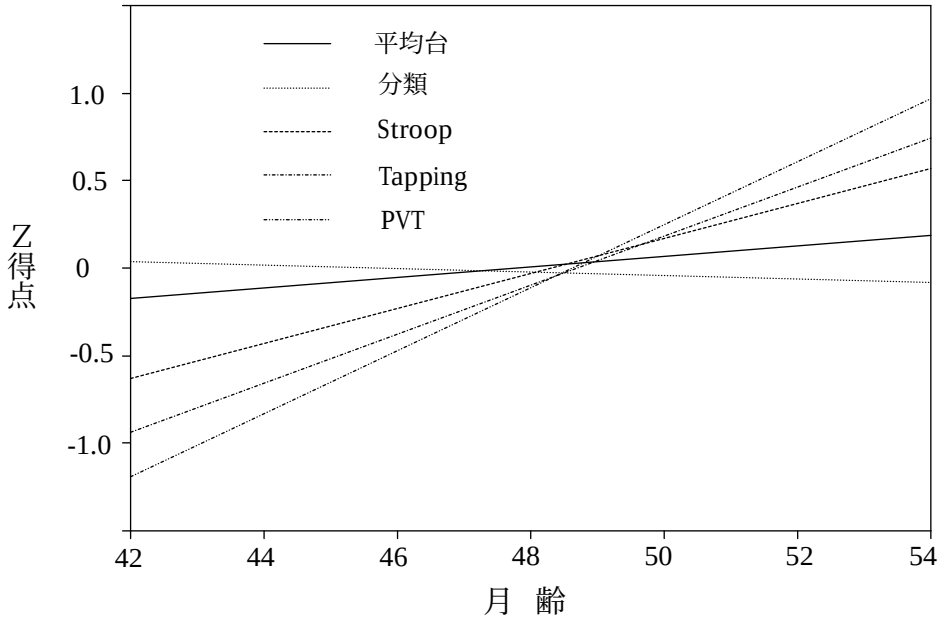


Figure 1.　各課題の得点の発達軌跡

第 4 節　自己制御と母子相互作用との関連

自己制御を気質のひとつとしてみたとしても，その発達と環境要因との関連はないということにはならない。たとえば，Feldman, Greenbaum, & Yirmia（1999）は，自己制御の 2 つの重要な側面として，前言語期における母子間の相互制御と気質要因をあげている。それによると，自己制御は相互制御的な親子システムの状況において発達し，対面での相互作用中の感情表出の協応が相互的制御から自己制御への移行を促進する，という発達経路が想定されている。同様に，Emde（1992）も，対面相互作用における母子間の調和性は，自己制御の統合と社会的適合性が生起する最初の状況を提供すると述べている。

Kochanska, Forman, Aksan, & Dunbar（2005）の母子間相互反応的志向性（mother-child mutually responsive orientation）という概念も，相互制御的システムと関連していると思われる。母子間相互反応的志向性とは，母子間の肯定的で緊密な，相互に結びつける協力的関係をさし，多くの肯定的な社会化の帰結をもたらすものである。さらに，母子間の相互交渉において大人が構築するコミュニケーション構造をさす足場（scaffolding）（Wood, Bruner, & Ross，1976）という概念も，相互作用の中で生じる相互制御的システムのひとつに含まれるのではないかと考えられる。これらの概念は，自己制御の発達と母子相互作用のあり方は関連していることを示している。

足場の意味することは抽象的であり，母子間相互反応的志向性は母子相互作用に対する

全体的印象から評定されることから，両概念ともに母子間で生起するやりとりの全般的特徴を概括的に捉えているといえよう。これらの概念に対して，より具体的な行動水準としての母子相互作用と自己制御の関連を捉えた概念として，注意の共制御がある。Conway & Stifter（2012）は，対象児が 2 歳のときに，気質によって彼らを活発，低反応，抑制的の 3 群に分類し，併せて，対象児が問題解決に取り組んでいるときに，母親が子どもの注意をどのように方向づけるのかを測定した。そして，4 歳 6 か月時に子どもの葛藤抑制課題（自己制御課題のひとつ）の成績を測定した。その結果，2 歳時点において，子どもが自ら対象に向けている注意の持続を促進する母親の行動が多いほど，活発群と抑制群における葛藤抑制課題の成績は高かった。一方，子どもが注意を向けている対象とは別の対象に注意方向を変更する母親の行動が多いほど，抑制群における葛藤抑制課題の成績は低かった。すなわち，Conway & Stifter（2012）は，母親が子どもの行動を制御するために用いる行動（注意方向を操作する行動）と，それに対する子どもの注意方向および行動は互いに関連しており，したがって，母親は子どもの制御方略に影響を及ぼし，かつ，子どもの行動によって影響を受けていることを示した。母子間における随伴的な行動の分析にもとづくこの結果から，自己制御の発達と母子相互作用には関連のあることは明らかである。

第 5 節　母子相互作用と子どもの発達との関連

自己制御の発達を共制御という観点からみるとき，自己制御と母子相互作用の関連を調べることは重要な研究課題であることがわかる。しかしながら，自己制御は気質のひとつとみなされているために，これらの関連は明らかになっていない。一方で，数多くの発達研究は，子どもの発達にとって初期の母子関係が大きな役割をもっていることを明らかにしている。この節と次節では，母子相互作用と子どもの発達の関連に関する研究を概観し，自己制御との関連を分析し，考察するための前提を提示する。

母子に関連する理論の中で，もっとも代表的な理論は Bowlby の愛着理論である。この理論では，人間の健全な心身発達にとって，子どもと養育者との間の情緒的な絆の重要性が強調される（Bowlby，1988）。Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall（1978）は，実証的な方法を用いて，子どもの欲求や状態の変化に敏感で応答的な養育が，子どもに安定した愛着をもたらすことを明らかにし，Bowlby の主張を実証的に確認した。そして，安定型の愛着パターンの子どもは，肯定的な自己評価，情緒的健康，肯定的感情，社会的有能性を示す（Weinfield, Sroufe, Egeland, & Carlson, 1999）。さらに，発達初期における愛着パターンは，

児童期から成人期まで持続する（Prior & Glaser，2006）。Emde & Sameroff（1989）は，母子関係が支持的であるかどうかが，子どもの健康な発達に関連していると主張している。このように，子どもの発達について論じるとき，母親との関係を組み込むことは，極めて重要なことであると考えられる。

一般的に，2 者の活動が連動し同期したとき，その場に参加している者は一体性を感得することができ，心地よさを感じる。母子においては，このような肯定的感情は母親の養育の意欲を向上させ，子どもは母親への信頼と依存を基盤として，自律性を培い，外界へ能動的に接近する（渡辺，1989）。Schaffer（1984）は，母子相互作用の長期的な機能として，子どもを特定の文化の枠組みに適合させることに関する技術の習得させる場であると述べている。このように，母子相互作用は子どもの発達に強く関与している。

第 6 節　母子相互作用の特徴を表す諸概念

子どもの発達における子どもと母親との関係，あるいは母親の役割を議論するとき，母子関係（mother-infant relationship）と母子相互作用（mother-infant interaction）という 2 つの用語が用いられる。Stern-Bruschweiler & Stern（1989）は，これら 2 つの用語を次のように区別し定義している；相互作用とは 2 者間で行われる行動のやりとりであり，客観化可能であり，関係とは，その相互作用に加えて，2 者それぞれが相互作用を通して経験したことの主観的表象を含む概念である。そして，相互作用は関係の測定可能な指標である。

Schaffer（1984）によると，社会的行動が観察できるもっとも具体的な水準は相互作用の水準であり，関係性についてなにかを述べるのであれば，相互作用の水準を認識しておかなければならないという。さらに，Sroufe（1989）は，関係性を記述するためには，相互作用のパターンへの言及が必要であると述べている。これらの母子相互作用の定義と指摘にもとづき，本研究では，行動水準における母子間のやりとりを分析対象とする。

以下に示す 2 つの古典的な研究から，母子相互作用には相互性という特徴があることが示されている。Stern（1971）による，3 か月児の双生児（M 児と F 児）とその母親との相互作用の分析では，2 者の視線の合致，発声，そして，接近－回避パターンが指標として測定された。その結果，このように幼い乳児が相手であっても，母親の行動は 2 名の間で大きく異なり, 母親と M 児, 母親と F 児の相互作用の様相は大きく異なることが示された。すなわち，子どもは母親の動きにただ追従しているのではなく，子どもそれぞれに行動の特徴があり，母子は相互に規定し合って行動していることが明らかにされた。Trevarthen

（1979）は，2 か月児とその母親との相互作用を，発声，身体の動き，そして，活動性の水準を記録した。映像記録の分析から，両者が自分の行動を互いに相手の行動に調整させている様子を見出し，それを相互主体性と表した。

このように母子間の相互性を強調する考え方は，親の養育によって子どもが社会化されるという一方向的研究から，親と子どもの互恵的影響を強調する双方向的研究への移行という，発達心理学におけるもっとも大きなパラダイム・シフトである（Schaffer，1999）。Schaffer（1999）は，この変化によって，発達心理学研究の研究対象は個から関係に移行したと述べ，それに伴って，以下の 3 点を考慮する必要性を提示した：(1）親の感受性や応答性といった特性，(2）親子間の相互調整，(3）2 者を同時に観察する研究方法の採用。母子それぞれの特性は，相互に規定的な相互作用の経過とともに変化するという主張は，発達精神病理学の領域においては，Sameroff & Fiese（2000）の相乗的相互作用モデルに示されている（Figure 2)。この図には，比較的長期の時間経過の中で，親子が相互の影響を受けながら，子どもにおいては行動が，そして，親においては表象が変化していく様子が示されている。

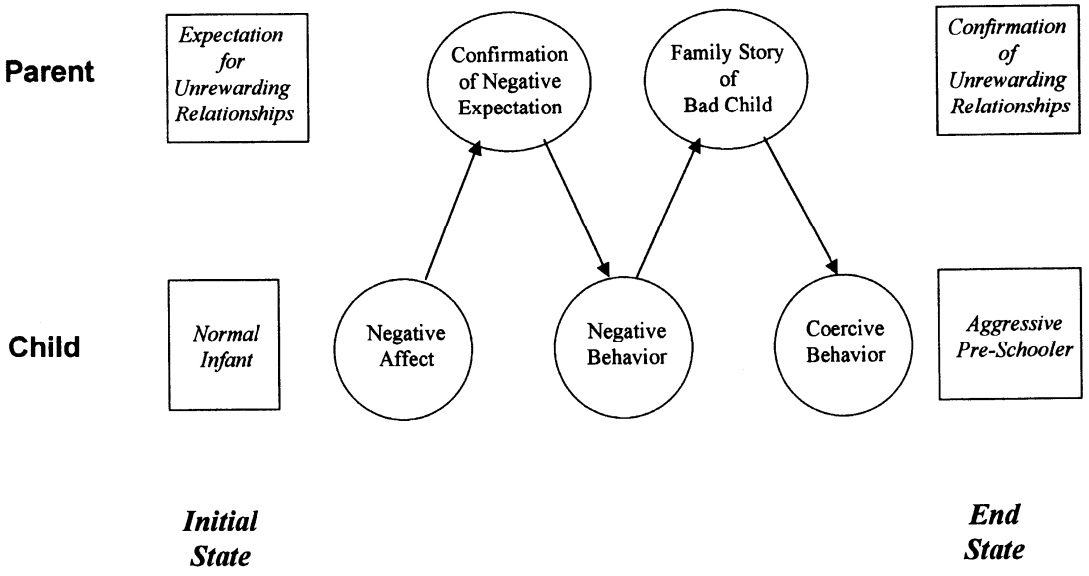


Figure 2. Sameroff & Fiese（2000）の相乗的相互作用モデル[注 3]

注 3　子どもが表出する否定的感情を（子どもが否定的感情を表出することは自然なことである)，子どもに関する否定的な期待の確証と親が捉えた場合，それが子どもの否定的な行動を生じさせ，そのことによって親に悪い子どもという評価が形成され，結果的に子どもはそれに応じた行動を示すようになるという相互規定的な親子関係を，この図は表している。

Stern（1971）と Trevarthen（1979）が対象とした乳児よりも年長になると，母親の相互作用の中に玩具などの物が加わる。この状態を，岡本（1982）は三項関係とよんでいる。子どもは相手のその物に対する扱い方を見ることによって，対処のしかたを学ぶ。この現象が生起するためには，2 者間において対象が共有されなければならない。そして，それは 2 者間の視線の共有をとおして生起するという。

本論文の主題のひとつである視線の共有は, 共同注意という現象として研究されている。共同注意研究の嚆矢である Scaife & Bruner（1975）によると，生後 2〜4 か月の乳児は対面した大人が頭と目を 90 度動かしたときに，大人の視線を追う場合があること，そして，8〜10 か月になると，この視線追従の率が大きく向上する。Butterworth & Jarrett（1991）は，さらに詳細な条件で共同注意を測定した。その結果，大人の視線の方向に複数の対象物があるときに, 正確に特定の対象を選択できるようになるのは 12 か月くらいであること，そして，自分の視野の外にある対象物に対しても大人の視線を追従するようになるのは生後 18 か月を要することが示された。これらの研究から，母子の関わりは 1 歳前後から三項関係が主流になることがうかがえる。

視線の共有が子どもの発達にとって決定的に重要であることは，自閉症児において視線の共有が生起しないことからもわかる。ビデオ記録を用いた後方視的研究によって，自閉症児は乳児期初期に他者の顔を見る頻度が定型発達児に比べて少ないことが示されている（Maestro, Muratori, Cavallaro, Pecini, Cesari, Paziente, Stern, Golse, & Palacio-Espasa，2005）。さらに，新しい物の名前を教わる文脈において，定型発達児は自発的に大人の視線を参照し，物の名前がどれを指すのかを見極めるのに対して，自閉症児は聞いたことばと，そのとき自分が見ていた物との間に関係があると学習する（Baron-Cohen, Baldwin, & Crowson, 1997）。これらの結果から，千住（2012）は，他者の視線は重要な社会的情報であり，他者の視線への反応性は社会脳の発達に重要な役割を果たしていると結論している。

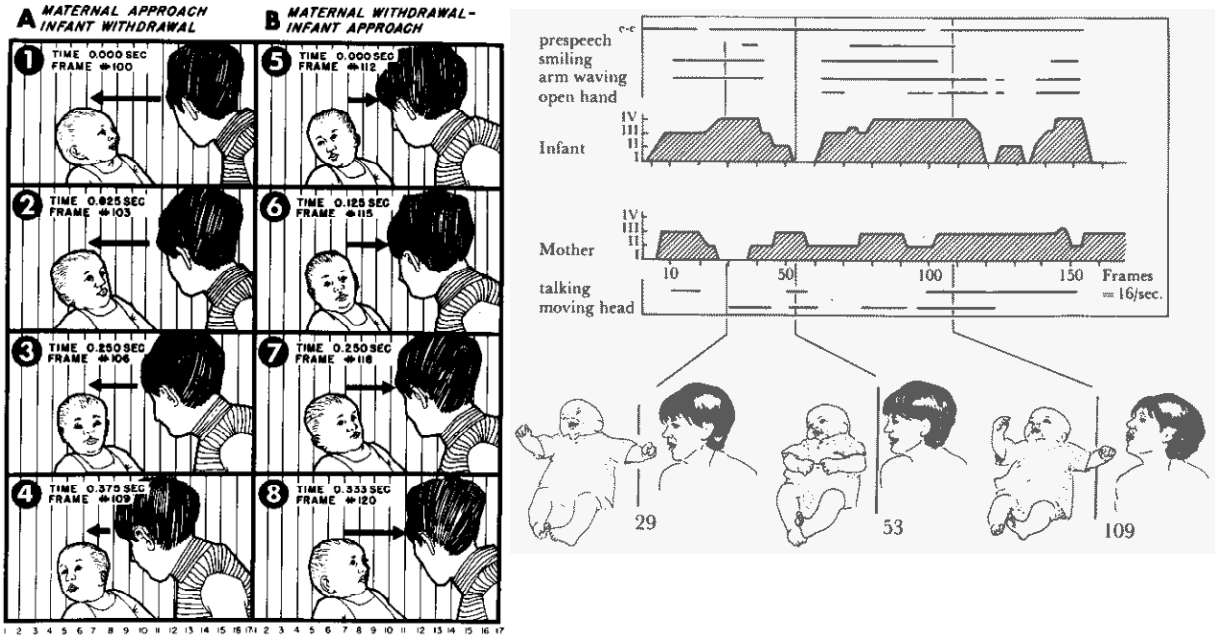
このように，共同注意は極めて重要な現象であるが，日常生活場面における母子の相互作用の特徴を十分には記述していない。すなわち，子どもと接している大人は，注意が共有されている対象に視線だけを向けるのではなく，声や表情を使って，子どもが対象に注意を向けやすいようにする（大藪，2004）。さらに，対象を操作してみせたり，受け渡しや指さしたりなども行なう（Carpenter, Nagell, & Tomasello，1998）。このような共同注意の様相は，Scaife & Bruner（1975）や Butterworth & Jarrett（1991）の共同注意の概念では捉えられない。Bakeman & Adamson（1984）は，母子双方の視線の方向，他者と共有される活動

と他者，そして，他者と共有される対象の観察項目を設定し，日常的な文脈に即した共同注意の状態を共同的関わりという概念で捉えた。

第 7 節　母子相互作用の測定方法

前節において，母子相互作用の特徴を説明した。本節では，そのような特徴に適合した母子相互作用の測定方法について述べる。

乳児と母親との相互作用にみられる視線の動き，発声，母親によって注意深く抑制される興奮の増大，それぞれの合図のタイミングと他の感覚様相の合図との統合，これらはすべて時系列で生じるやりとりである（Schaffer，1984）。この見解と符合して，Stern（1971）と Trevarthen（1979）は，それぞれ母子間のやりとりの一部を切り出し，映像フィルムのフレームに写る映像から母子の行動を記述し，2 者間の相互性という特徴を描き出した（Figure 3）。



A　　B

Figure 3.　Stern（1971）が示した結果（A）[注4] と Trevarthen（1979）が示した結果（B）[注5]

相互作用の決定的特徴は時間の中で展開することであり，時系列的視点は社会的相互作用の動的過程の解明に最善の可能性を提供する（Bakeman & Gottman，1997）という観点にもとづくと，Stern（1971）と Trevarthen（1979）の結果の提示のしかたと，そこから読み取れる内容の妥当性は高いと考えられる。さらに，ある行動とある行動との間に随伴性

があるかどうかを明確にするという時系列分析に要請される条件（Bakeman & Quera, 2011）を，これらの研究は満たしている。この点についても，Trevarthen（1979）は概念図を用いて示している（Figure 4）。この図は，母子相互作用のサイクルは同期的（a），子ども先行－母親後続（b），母親先行－子ども後続（c）という 3 種類の構造をもっていることを明示している。正に，これらの研究は，相互作用は時間の中で展開すること，そして，観察で用いられる変数は，ある行動とある行動との間に随伴性があるかどうかを明確にする必要があるという基準（Bakeman & Quera，2011）を満たしている。

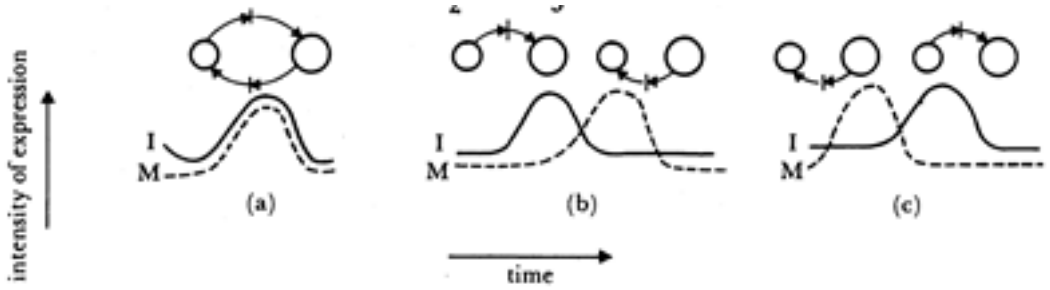


Figure 4. Trevarthen（1979）による相互作用の図式[注6]

このように優れた測定方法でありながら，Stern（1971）と Trevarthen（1979）が用いた分析方法は，その後，他の研究者によって用いられることはない。この理由として，結果が映像の図化によって提示されていることにあると推測される。この方法は，相互作用の性質の直観的な理解に役立つことは確かであり，臨床心理学的にも極めて有用な着想や洞察をもたらす。しかし，直観的な結果の読み取りは恣意的にもなりやすいという欠点をもつと考えられる。さらに，結果の提示方法が個別の事例にもとづく個性記述的なものであ

注 4　母親が子どもに近づくと子どもは体を後方にのけぞらせる。そして，子どもが母親に近づくと母親が後方に引き下がる。この連続したコマ割り図は，このような不調和な母子のやりとりを示している。

注 5　ⅠからⅣは母子の身体活動の活性水準を示し，各横線は相互の注視，前言語，微笑，腕の動き，おしゃべり，頭の動きの生起を示している。たとえば，活性水準を見ると，母子の活性化が交互に生起していることが示されている。

注 6　I は乳児の行動，M は母親の行動であり，各線が山型に隆起している部分はそれらの行動が生起したことを示している。

るために，母子関係に関する理論の検証には適していないと判断されるためではないか，という理由も推察される。

映像による分析に対して，Bakeman & Adamson（1984）は，母子相互作用を一定の時間持続（3 秒間）をもって子どもが他者と対象に注意配分しながら，他者とともに共通の対象に関わる状態（共同的関わり）という，操作的に定義された指標の計測によって分析した。この方法は，母子間で生起するやりとりを即時的に捉え表示するのではなく，相互作用を構成する複数の行動が一定時間内に生起したことを，状態コードによって測定する。この研究では，母子の縦断的観察にもとづき，双方の視線の方向や玩具の操作と，それが生起した文脈から，各エピソードが支持的であるか協応的であるかが判断された。各関わりが関わり全体に占める比率で表され, 18 か月前後に, 共同的関わりは支持的な（supported）状態から協応的な（coordinated）状態に発達することが明らかにされた（Figure 5）。

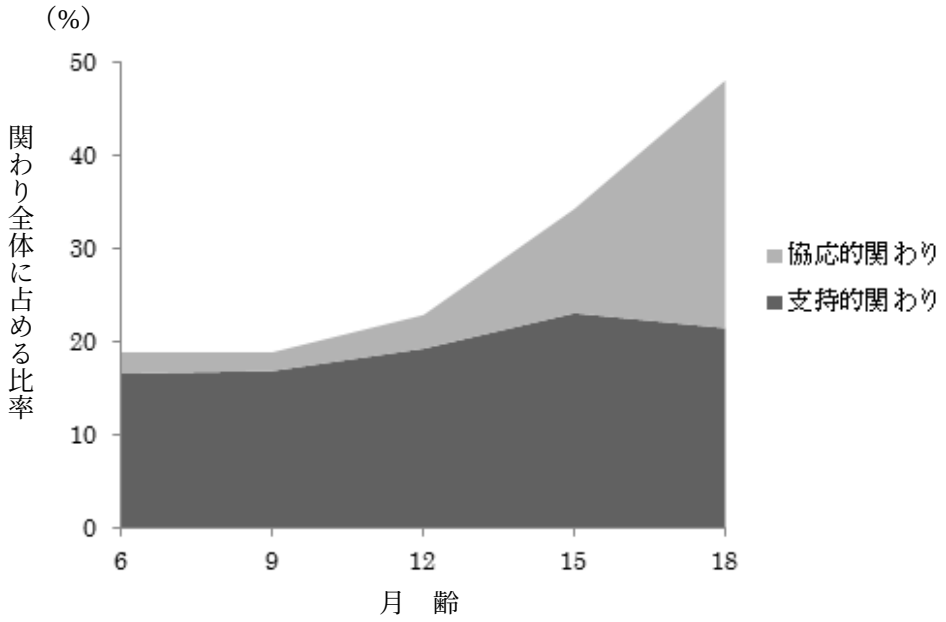


Figure 5.　Bakeman & Adamson（1984）の結果（この結果をもとに作図した）

一定の状態にある相互作用の特徴を操作的に定義することによって，そして，多くの母子を対象とすることによって，Bakeman & Adamson（1984）の研究は共同的関わりの発達的変化を実証的に提示することに成功している。しかしながら，相互作用は時系列で生じ（Schaffer，1984），相互作用の決定的特徴は時間の中で展開する事象であるという指摘（Bakeman & Gottman，1997）を考慮すると，ある特徴をもった状態の全体に占める割合

を示すだけでは，各時期の相互作用の特徴を明らかにしたとは言えないであろう。時系列的事象の本来の分析は，Stern（1971）と Trevarthen（1979）が行なったマイクロ分析と，Bakeman & Adamson（1984）が行なったように，ある行動をその構成要素から定義し，量的に測定する方法の 2 つが組み合わされなければならないと考えられる。

さらに，Bakeman & Adamson（1984）の分析方法には，共同的関わりが支持的状態から協応的状態に発達したとき，母親にはどのような変化が生じたのかということが示されていないという問題点がある。Bakeman & Adamson（1984）が想定する共同的関わりの発達は，以下のように読み取ることができよう：能動的に注意を配分する子どもの能力が未発達であるために，母親が「支持的」であることによって共同的関わりが成立する，そして，子どもの注意を配分する能力の向上に伴って，母親と子どもは「協応的に」共同的関わりに寄与する。この説明では子どもの変化に焦点が合わされているために，共同的関わりが支持的状態から協応的状態へ変化するときに，母親の役割がどのように変化したのかということが明確ではない。このことは，相互作用においては 2 者間の双方向性を考慮することが重要であるという主張（Schaffer, 1999）にもとづくと，解決すべき理論的課題である。

共同注意研究では，Butterworth & Jarrett（1991）が示しているように，子どもの発達的変化は詳細に記述されている。共同注意を子どもの個体としての能力とみなせば，子どもの変化を示すことによって，研究目的は達成される。しかし，共同的関わりは本来，母子相互作用の相互性を捉えるための概念であることを考えれば，母親の発達的変化も包含した共同的関わりの発達過程を明らかにする必要がある。

ここまでの議論において，子どもと母親の行動を測定することが，母子関係の性質の解明につながることを述べてきた。しかし，相互作用研究に対しては批判もある。鯨岡（1999）は，関係発達論の立場から相互作用研究にもとづく議論を厳しく否定する。鯨岡（1999）による相互作用研究の問題点は次の 2 点である：(1)母子の行動のタイミングが合うこと，相補性があることが良好な母子関係の操作的定義になり，母子関係の関係という意味を極めて狭く限定することになった，（2）関係は行動的関係のみならず，主観的，間主観的な関係としてあるはずであり，それとして捉えられるべきである。

この批判の（2）は，母子関係を客観化可能な行動と主観的表象の 2 側面に分割する着想（Stern-Bruschweiler & Stern，1989）が原理的に誤りであることを指摘しているように考えられる。この主張は，本研究が用いた測定方法の妥当性に直接的に影響するものである。原理的な議論によってこの批判に回答することは，本論文の主題を超える。しかし，（1）

に関する以下の議論によって，これら 2 つの批判に対する一定の回答を試みる。

Pentland（2008）は，成人 2 者の相互作用を操作的に定義された 4 つの行動（社会的シグナル）によって測定した。これらの行動は本人が意図的に制御できないものであることが確かめられている。電子機器を活用することによって，多数の 2 者の相互作用が長時間にわたって即時的に記録された。この研究の結論は，これら 4 指標の生起比率が相互作用の特徴を表現することができたというものである。そればかりではなく，この生起比率は研究参加者の意図や関心と一致し，さらに，冒頭部分の相互作用からその相互作用の結末を予測することができた。この結果は，相互作用の構成要素を適切に抽出した場合，その数量的指標は対象者の主観的な状態と一致すること，そして，少数の行動サンプルによって全体特徴を予測できるということを明らかにしている。Pentland（2008）のこの結果は，測定する行動が相互作用の特徴を適切に捉えている場合，対象者の主観についても正確に推測できることを示している。この結論によって，本研究が採用した相互作用の測定は方法論的に妥当であると判断されるであろう。

第 8 節　研究目的

本研究の目的は，定型的な発達を示す乳幼児期の母子相互作用研究から得られた結果を，子どもの発達支援と臨床心理学的問題を示す母子関係の改善に活用することである。その前提として，子どもの社会性発達過程における母子相互作用が果たす役割を明らかにすることを目指した。

はじめに，乳児期から toddler 期までの母子相互作用に関する実証的研究を提示する。この研究のデータの分析においては，相互作用は双方向的現象であるという前提から，母子の行動の関連性とその発達的変化の理解を試みる。そして，そこで明らかになったことにもとづき，幼児期の子どもの社会性発達における母子相互作用の役割を考察する。

乳児期から toddler 期の母子相互作用の役割と，幼児期の子どもの社会性発達とを関連づける論理的根拠は，共同的関わりと共制御という概念間にある相違点と類似点である。相違点は，共同的関わりは乳児期から toddler 期の子どもと母親の相互作用の特徴を表す概念であることに対して，共制御は幼児期の子どもと母親の相互作用の特徴を表す概念であるという，両概念が対象としている時期の相違である。一方，類似点は両概念が捉える母子相互作用の特徴にある。すなわち，共同的関わりの支持的側面は，共制御における，母親による子どもの注意方向を操作する行動に相当する。そして，共同的関わりの協応的側面

は，共制御における，子どもの行動によって母親の制御方略が影響を受けるという現象に相当する。このように，両概念は母子相互作用の発達を極めて類似した側面から捉えている。このような相違点と類似点をもつ 2 つの概念を活用することによって，乳児期から幼児期までの母子相互作用を一貫した視点で理解することができる。さらには，乳児期の母子相互作用の発達的帰結として，幼児期の自己制御の発達を位置づけることができるのではないかと考えられる。

これらの議論の前提となる母子相互作用の特徴を的確に捉えるために，本研究では，測定に関する方法論の検討を行なった。すなわち，共同的関わりや共同注意の測定に用いられる指標を観察項目として用い，それらの生起のマイクロ分析によって母子相互作用を分析した。この方法によって，母子相互作用を時系列的に分析することの有用性を検証する。

第 2 章　研究 1：母子相互作用の共同的関わりの視点による分析[注 7]

研究 1 の構成と目的

序論において，母子相互作用には次のような特徴があることを示した：(1) 相互的な協応性がある（Stern，1971；Trevarthen，1979），(2) 自己－関わる相手－関わる物という三項関係の中で，子どもは物の扱い方を学習する（岡本，1982），(3) 三項関係においては共同注意が生起している（Scaife & Bruner，1975；Butterworth & Jarrett，1991），そして，(4) 日常場面においては，共同注意よりも共同的関わりという概念によって，相互作用を捉える方が適している（大藪，2004）。これらの視点には、幼い乳児であっても母親とのやりとりの形成に対して主体的な関与をしていることが示されている。さらに，子どもが幼い場合，調和的な相互作用の成立における母親の役割が大きいことを示し（Adamson et al.，2004），その極端な例として虐待事例をあげた（Cerezo & D'Ocon，1995；Milner，2003）。一方，子ども側の要因として，乳児期から幼児期への移行期に生起する扱いの困難性があることも指摘した（Crowell et al.，1988）。

本研究の観察 1 では，運動面，認知面，言語面における発達が顕著となり，親にとっての養育の困難性が生起し始める 1 歳後半の子どもと母親との相互作用を観察した。この年齢の子どもと母親を対象とすることによって，相互作用の特徴が顕著に表れると予測したからである。観察する内容は，相互作用中の母子双方の主体的関与と，子どもの発達的特徴のいずれをも捉えることのできる共同的関わりであった。共同的関わりは，一定の持続

注 7　本研究は，「共同的関わりの視点による母子間の反応調和性の分析（第 60 回中国四国心理学会，2004）」，「共同的関わりの視点による母子相互作用の分析（川崎医療福祉学会誌，2005, vol.15）,「母親－乳児相互作用における母子の役割の発達（第 53 回日本小児保健学会，2006）」,「2 組の母子における共同的関わりの縦断的マイクロ分析（川崎医療福祉学会誌, 2007, vol.17）」，「2 組の母子における共同的関わりの縦断的マイクロ分析－視線行動と身振り行動の応答に関する分析－（第 63 回中国四国心理学会，2007）」，「母子における共同的関わりの縦断的マイクロ分析－遊び場面における視線行動と身振り行動を中心に－（第 19 回日本発達心理学会，2008a）「母子における共同的関わりの縦断的観察－注視行動と身振り行動のマイクロ分析－（小児保健研究，2008b，vol.67）」において，報告，発表した内容にもとづいている。

時間をもって子どもが注意を他者と対象に配分しながら，他者とともに共通の対象と関わる状態のことをさし（Bakeman & Adamson，1984；Adamson et al.，2004），相手に対する気づきの問題を組み込み，乳児‐物‐母親というこの時期の発達的特徴である三項関係の様相全体を把握しようとする優れたアイディアと内容が含まれている（大藪，2004）。

しかし，この定義からも分かるように，ある行動が共同的関わりであるかどうかは前後の行動（たとえば，母子双方における視線の方向や玩具の操作）や文脈によって決まり，瞬間的に生起しているやりとりが，共同的関わりであるかどうかの判定は，容易なことではないと考えられる。したがって，本研究では，このような複数の要素を含んだ行動を同時的に判断する方法ではなく，時系列分析にもとづく方法を用いる。そのためには，共同的関わりを構成する行動を観察可能な項目として分割する必要がある。この観察項目の設定のために，本研究では，Carpenter et al.（1998）を参考にした。彼らは，乳児が大人の顔と両者の間に置かれた対象の両方へ視線を向けること（交互視）を，共同的関わりの要件と考えた。そして，交互視を前提として，子どもが大人の注意と行動を方向づける方法を叙述的身振りと命令的身振りの 2 種類に分類した。

本研究においては，他者とともに共通の対象と関わる母子の視線の方向と相手の注意を方向づける身振り行動を記録し，それらの組み合わせから反応を時系列的に捉えることによって，一連の行動が共同的関わりであるかどうかを判断するという方法を試みた。そのとき，2 種類の身振り行動のうち，叙述的身振り行動だけを記録した。これは，命令的身振り行動が，むずかり声を出しながら対象に手を伸ばす，あるいは，指さしすると定義された行動であり，本研究が対象とする年齢の子どもには幼すぎる行動と判断したからである。さらに，時系列分析は個々の行動の時々刻々のコード化と行動の事象ごとの連続性の記録である（Bakeman & Quera，2011）という指摘にもとづき，行動を即時的かつ微視的に捉えることのできるマイクロ分析（岡本，2000）の手法を取り入れた。

はじめに，観察 1 では，母子の相互作用を時系列的に記録し，それらを共同的関わりの視点から再構成することによって，相互作用の特徴を明らかにすることができるのかどうかを検討した。観察 2 においては，2 組の母子の相互作用を縦断的に観察し，共同的関わりの発達を調べた。観察 3 では，対象者を増やすことによって，さらに，母子間の応答性に焦点を当てることによって，観察 2 で示された共同的関わりの発達的変化の明確化を試みた。

観察 1：共同的関わりの分析法の検討

方法

観察対象者

本観察とは別の目的をもった研究に対する協力者の募集のために，K 市保健所の 1 歳 6 ヶ月健康診査会場において研究への参加者を募り，23 組の母子の応募があった。本観察はその研究の一部として実施されたものである。

本研究の分析対象として十分な時間の相互作用を記録できた（基準については後述する）母子は，23 組のうち 4 組であった。さらにこの分析では，時系列分析が母子相互作用の特徴を表すかどうかを確かめるために，母親の子どもに対する関わり方が対照的である 2 組（以下，母子 1，母子 2 とする）を選択した。対照性の基準として，積極性と消極性を設定した。母子 1 の母親は積極的であり，母子 2 の母親は消極的であった。母子 1 と 2 の子どもの初回観察時年齢は，それぞれ 1 歳 10 か月（男児）と 1 歳 9 か月（女児）であった。2 名の子どもは，ともに健康診査の結果に異常はなかった。

観察場面

23 組の母子は，およそ 2 週間間隔で 10 回にわたり川崎医療福祉大学臨床心理学科集団療法室に集合した。そこでは，1 名の保育士によって，母子が楽しく過ごせるように遊びや玩具が導入された。母子に対して，ある行動をするように強く働きかけることはせず，自然な遊び場面になるよう工夫されていた。1 回の時間は 1 時間 30 分であった。

室内での母子の行動を，隣の観察室からビデオ録画した。録画対象の基準は，母子が相互にやりとりをしている場面であった。したがって，事前に対象者を決めることはできなかった。分析対象とする場面として，当該母子が他の母子から独立して 1 分間以上続くやりとりをしている状況という基準を設定し，対象となった母子の相互作用のうちその基準を満たしたのは 4 場面であった：母子 1 の 1 回目と 2 回目はそれぞれ 3 分 25 秒，3 分 22 秒であり，母子 2 ではそれぞれ 3 分 23 秒，4 分 14 秒であった。分析対象となる相互作用は，2 組ともに約 2 ヶ月の間をあけて録画された 2 場面であった。

観察カテゴリー

Carpenter et al.（1998）にしたがって，観察カテゴリーとして，視線の方向と叙述的身振

りの 2 つを設定した。叙述的身振りとは，相手の注意や行動を方向づける活動である。

視線の方向を，同じ対象の同時注視，相手を見る，無関与という 3 種類に分類した。同時注視や相手を見るというカテゴリーについて，母子の視線の正確な方向を見定めることが困難な場合があったために，実験室的厳密さより生態学的妥当性を優先させた van Egeren, Barratt, & Roach（2001）にしたがい，相手や対象の方向を見ている行動をもって「～を見ている」と見なした。同時注視と無無関与は母子の共通の行動に対してコードされるカテゴリーである。

相手を見る，叙述的身振りのカテゴリーにおいては，母子のどちらからその行動が生起したのかということが，行動の時系列的分析の観点から重要な情報となる。したがって，それぞれのカテゴリーについて，行動の起点を区別して記録した。

カテゴリーの定義は以下の通りである：①同時注視；子どもと母親が同じ物ないし人を見ている。②無関与；（A）子どもが周囲を見ているが，特定の人や物を見ていない。（B）母親が周囲を見ているが，特定の人や物を見ていない。③相手を見る；（A）子どもが母親を見る。（B）母親が子どもを見る。④叙述的身振り 1；（A）子どもから母親への物の提示ないし手渡し。（B）④の（A）に応じた母親の反応。⑤叙述的身振り 2；（A）母親から子どもへの物の提示ないし手渡し。（B）⑤の（A）に応じた子どもの反応。

コーディング

上記の観察カテゴリーにもとづいて，行動記録分析装置（マイクロメイト岡山社製）を用いてマイクロ分析を行なった。各カテゴリー事象の生起の確認，判定は，臨床心理学科の学生 2 名による協議にもとづいて行なわれた。

結果と考察

4 観察場面の記録時間が異なるために，各カテゴリーの累積生起時間が全観察時間に占める割合を比較した。その結果を Table 1 に示した。2 組の相互作用の違いがいくつかのカテゴリーに見られた。

1 回目の観察において，母子 1 の同時注視の割合は母子 2 よりも多かった。そして，母子 2 の母子の無関与の割合が，母子 1 よりも顕著に多かった。さらに，母子 2 においては，叙述的身振りがほとんど生起しなかったのに対して，母子 1 においては母親からの関わりに対して子どもがよく応答していた。視線行動についてみると，いずれの母子においても，

母親が子どもを見ることはあっても，子どもが母親を見ることはなかった。母親が子どもを見る割合について，母子 1 において母子 2 よりも多いという差があった。これらのことから，母子 2 の相互作用は，母子 1 と比較して，相互のやりとりが極めて少ないこと，そして，母子 1 の相互作用では，母子が共通の対象に注意を向け，相互に応答的であることが読み取れる。2 回目の観察では，母子 2 の同時注視と叙述的身振り 2 の割合が，母子 1 よりも多かった。母子 1 においては，1 回目よりも相互性を示す特徴が減じた。

Table 1 全観察時間に占める各カテゴリーの累積生起時間の割合

	同時注視	無関与		相手を見る		叙述的身振り1		叙述的身振り2	
		子	母	子→母	母→子	子→母	母応答	母→子	子応答
母子1									
1回目	15.6	3.0	0.1	0.0	18.2	1.0	1.4	6.2	3.1
2回目	22.0	6.6	4.4	2.7	9.6	0.4	0.2	6.2	1.6
母子2									
1回目	1.5	58.1	43.8	0.0	8.2	0.0	0.0	0.7	0.0
2回目	27.0	3.9	26.1	1.2	2.3	1.0	1.1	7.9	7.9

単位：%

1回目と2回目の観察における母子1と2の相互作用の一部のマイクロ分析結果を, Figure 6 に示した。母子 1 の 1 回目には，無関与の後に同時注視にあり，その後，母親から子どものへの身振り行動，それに対する子どもの応答エピソードが 2 回あり，このエピソードの間に，母親が子どもを頻繁に見ていたことがわかる。2 回目には，同時注視の間に母子が互いに相手を見て，その間に母親から子どものへの身振り行動と，それに対する子どもの応答が生起していたことが示された。

母子 2 の 1 回目では，長い無関与が続き，2 回の同時注視の間に母親が子どもを見て，身振り行動も生起したが，子どもはそのやりとりに参加していなかったことがわかる。2 回目になると，母親が子どもを見た後に同時注視が続き，その間に母親から子どものへの身振り行動と，それに対する子どもの応答が生起したことが示されている。しかし，その後に，再び母親の無関与が生起したという点において，母子 1 との違いが示された。

これらの結果から，マイクロ分析による共同的関わりの構成要素の量的指標とイベント・レコードの提示によって，2 組の母子相互作用の相違を示すことができたと考えられる。すなわち，イベント・レコードの結果は，Bakeman & Adamson（1984）と Adamson et al.

（2004）による共同的関わりの定義に含まれる前後の行動や文脈を，母子の行動の随伴的生起という形式で明示的に表すことができた。さらに，本観察のコーディング・システムでは，行動の起点を示す項目と，その行動に対する応答行動を示す項目を設定した。その

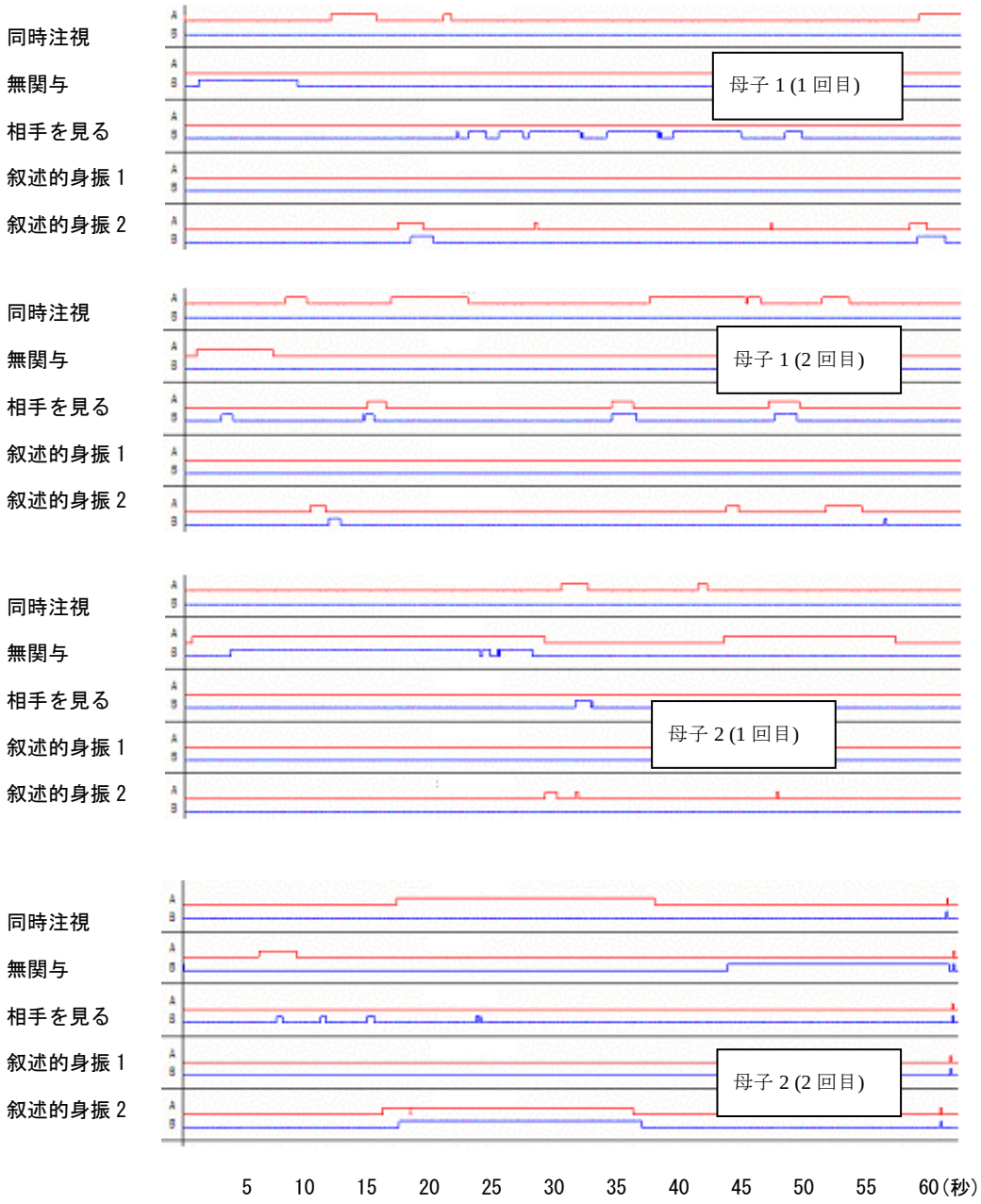


Figure 6. 母子 1 と 2 の相互作用のマイクロ分析によるイベント・レコードの結果

・各カテゴリーにおいて，線分の凹凸がその行動の生起と非生起を表示している。つまり，生起 非生起 ということを意味している。

・同時注視は母子の反応が一致している場合の反応であることから，その生起は一本の線分で表されている。その他のカテゴリーにおいては，上段と下段はそれぞれ，カテゴリー定義の反応（A）と（B）を示す。

ことによって，相互作用の相互性をより明確にみることができる。

さらに，結果から明らかになったことは，ある行動の量的指標として，累積生起時間と生起頻度のどちらが適しているかということである。すなわち,「相手を見る」と「叙述的身振り」のカテゴリーでは，1 回ごとの生起時間が短く，さらに，それらは，相互に関連しながら生起していることがイベント・レコードに示された。このことから，これらのカテゴリーの指標は, 累積生起時間ではなく生起頻度を用いる方が適切であると考えられる。イベント・レコードの結果は，子どもはいつも母親を見ているのではなく，社会的に意味のある状況の中で母親を見るのであるという Tomasello（1995）の見解と一致している。このような母子相互作用の特徴は，個々の行動の時々刻々のコード化と行動の事象ごとの連続性を記録する時系列分析（Bakeman & Quera，2011）によって，明確化されることが示された。

この観察には問題点も含まれている。それは，観察場面の統制が欠けている点である。自然観察であることによって，母親と子どもの日常的なやりとりを観察できた可能性は高い。しかし，2 組の母子間において，そして，2 回の観察場面間において，観察状況と母子の行動との関連，すなわち，内的妥当性の保証が欠けている（Pellegrini，1996）。このことと関連して，第 2 の問題点は，観察対象者の選定において，発達心理学的に明確な理由づけをすることができなかったことである。母子相互作用の発達を理論的に記述するためには，対象とする子どもの年齢が理論的に意味のあるものでなければならない。これらの問題を解決するために，観察 2 を実施した。

観察 2：共同的関わりの縦断的マイクロ分析

Bakeman & Adamson（1984）は，子どもと母親との相互作用を生後 6 か月から 18 か月にわたって観察した。観察期間中を通して，母親は子どもが玩具への注意を持続できるように，玩具が生気をもったものであるかのように扱い，あるいはその扱い方を例示した。その結果，2 者間での注意の共有が持続的に成立していた。Bakeman & Adamson（1984）は，この状態は，子どもの加齢とともに支持的な共同的関わり[注 8] から，18 か月になると協応的な共同的関わりに変化すると主張した。前者では，関わりの間，子どもは母親の存在にほとんど気がついていないのに対して，後者では子どもは能動的に母親および母親が関わっている対象に注意を配分して遊ぶようになるという，発達的に大きな変化が生じる。

支持的な共同的関わりと協応的な共同的関わりの違いは，子どもの能動的な注意配分の

有無にある。注意の配分がなされているかどうかを識別するためには，子どもと母親が相互にどのように関わるか，また対象にどのように関わるか，さらに，子どもが母親の関わりに対してどのように反応するかを明確にしなければならない。Bakeman & Adamson（1984）は，この 2 つの共同的関わりに該当する相互作用を一連の行動系列として記述した。しかし，それぞれの関わり状態で子どもがどのように注意配分するかの区別については，その基準が必ずしも明確ではない。たとえば，支持的な共同的関わりは，「相手もいっしょに遊んでいることやその存在すらほとんど気づいていない」状態と説明されている。それに対して，協応的な共同的関わりは，「母親が押していたトラックの玩具を子どもが押し，それから母親の顔とトラックを交互に見る」と説明されている。注意配分は子どもの心的過程である。したがって，ある場面で子どもが注意配分をしているかどうかを実証的に示すことは容易なことではない。もし共同的関わりを構成する行動を特定し，共同的関わりが時系列的にどのように生起しているかを基にして注意配分を操作的に定義することができれば，共同的関わりの測定はより明確化し，再現性の高いものになると考えられる。この点については，Walden（1991）の研究が参考になる。Walden（1991）は，「子どもが母親を見る」－「母親がメッセージを返す」という行動系列は，子どもが刺激を見た後，母親の方を見るかあるいは母親とやりとりし，再びその刺激を見るという，より大きな行動系列の中に含まれると考えた。この大きな行動系列は母子の視線行動と母子が対象に関わる行動から構成されている。これらの行動が随伴的に生起したとき，その行動系列は共同的関わりと定義される状態に相当する。このように考えると，共同的関わりは，母子の視線行動と対象に関わる行動の随伴的関係や生起順序を時系列的に分析することによって捉えることができる。共同的関わりの中で生起する視線行動は，母子が同一対象を見ること（同時注視；Tomasello，1995）と，母子が相手を見ることである。同時注視と子どもが母親の顔を見ることが交互に生起するとき，子どもは母親と対象に注意を配分しているといえる

注 8　Bakeman & Adamson（1984）はこの状態を受動的な共同的関わり（passive joint engagement）と概念化した。その後の研究（Adamson et al.，2004）で，この状態での子どもは大人に対して受動的でも無関心でもないことがわかり，この状態の成立条件は大人が共同注意のための足場を提供することであるという理解が示された。このような理解の変更によって，この状態は支持的な共同的関わり（supported joint engagement）という用語に修正された。この修正は妥当であると考えられるので，本論文でも支持的な共同的関わりという用語を用いる。

（Tomasello，1995）。母親が子どもを見た後に子どもが見返すことは，子どもが母親の存在に気づいていることの指標となる。

子どもの視線行動と同じく，母親の視線行動も同時注視と相手を見ることから構成される。同時注視は，主に母親が子どもの視線方向を追従することによって成立すると考えられる。母親が子どもを見ることは，子どもの注意標的を確かめるために必要な行動である。そして，子どもが母親を見た後に母親が見返すことは，相互作用が展開するために欠かせない支持的な行動である（遠藤・小沢，2001）。そして，母子が対象に関わる行動の中で注意配分に関係する行動は，母子がそれぞれ相手と対象や事象に関する注意を共有するために行なう行動である。子どもの注意配分の状態は，子どもが母親からのこの行動に対して応答的に反応することが指標となる。母親が子どもからの行動に対して応答的に反応することは，視線行動と同じく，相互作用を支持する行動である。

本観察では，視線行動と対象に関わる行動を「同時注視」と「母子がそれぞれ相手を見る行動」，「母子がそれぞれ相手の注意と行動を方向づける身振り行動」(Carpenter et al., 1998)，そして「この身振り行動に対する応答行動」で捉える。本観察の目的は，この視線行動と対象に関わる行動の随伴生起をマイクロ分析することによって，母子の共同的関わりの状態を明らかにすることである。協応的な共同的関わりが特徴的となる時期は 18 か月である（Bakeman & Adamson，1984）ことから，本観察では，分析対象月齢を 16 か月から 20 か月と設定した。もし 18 か月が共同的関わりの変化が生起する時期であるなら，18 か月を境に支持的な共同的関わりから協応的な共同的関わりへの移行が生起するはずである。この観察における観察項目は，この移行を次のような様相として表示することが予測される：支持的な共同的関わりでは，相手を見ることと身振り行動ともに，子どもよりも母親の行動の量は多い。そして，子どもがこれらの行動を行なった場合，母親は確実に応答するであろう。一方，協応的な共同的関わりにおいては，子どものこれらの行動が増加し，相互に相手から発信された行動に応答するであろう。そして，対象に対する注意を共有するために，同時注視の占める割合はいずれの共同的関わりにおいても多いであろう。

さらに，本観察の目的は，共同的関わりの発達において，母親の行動がどのように変化するのかを明らかにすることである。調和的な共同的関わりが成立するためには，子どもの行動に応じた母親の行動の変化も生じることが予測される。

本観察で分析対象とする子どもは，保育所に通う 2 名の男女である。男児は通常の家庭で育っていたが，女児は養育環境の問題を有していた。母子相互作用がどのようになされ

るかは養育環境と関連すると言われている。たとえば,養育上の問題を有する家庭の場合,母親の子どもの行動に対する随伴的反応は低く（Pomerleau et al.，2003），一方，子どもは母親にとって扱いにくい行動特性をもっていることがある（Crittenden，1992）。さらに，育児困難を持つ母親は相互作用中に子どもの注意を遮ることが多く，子どもの注意対象に合わせて遊びを展開することが少なく，そのために，親子間での注意の共有が困難である（則内・青木・菊池・里村，2004）。このような母子相互作用の特徴が，視線行動と対象に関わる行動を指標とした分析結果にも表れるのか否かを明らかにすることが第 3 の目的である。

方法

観察対象者

観察対象者は，同じ保育所に通う 2 名の子ども(男児 T と女児 K)であった。入所経緯には違いがあった。T 児の場合は，両親の日中勤務によるものであった。K 児の場合は，福祉当局による勧奨であった。K 児の母親は病弱であるために日常的な養育が十分ではない，また, 時間を問わず母親の交友にしばしば K 児を伴うために K 児の生活リズムが一定していなかった。そのため，母親だけによる養育は K 児の生育にとって不適切な環境であると福祉当局が判断した。しかし，乳幼児健康診査において生育の異常はどちらの子どもにも指摘されていない。この 2 組の母子について，子どもが 16 か月，18 か月，20 か月のときに観察を実施した。

観察場面

観察は対象児が通う保育所の一室において実施された。観察者は 6 種類の玩具，（a）ままごとセット，（b）幼児用ブロック，（c）つまみを押す／回すと音が出る玩具，（d）形合わせ，（e）お絵かきボード，そして，（f）形構成ブロックを準備した（付録参照）。その中から観察時期によって構成を変えた 4 種類の玩具を提示し，普段どおりに自由に遊ぶようにと母親に依頼した。

各観察時期での 4 種類の玩具の構成は以下のとおりである。16 か月では（a），（b），（c），（d），18 か月では（a），（b），（d），（e），そして 20 か月では（a），（b），（e），（f）であった。このような構成にしたのは，（a）はどの月齢でも母子間のやりとりを促進する玩具であり，（b）と（d），（e），（f）はそれぞれ 16 か月児，18 か月児，20 か月児にとって操作が

難しいために，母子間のやりとりを促進すると考えたからである。他の玩具は，子どもが単独でも操作可能であると考えた。

観察者は, 母子が遊んでいる様子をおよそ 2m 離れた場所から HDD ムービーカメラを用いて録画した。15 分間の観察時間の中から，遊び開始後約 2 分間経過した後の 10 分間の遊び場面を分析対象として用いた。

観察カテゴリー

観察対象となった視線行動は，母子が同じ対象を同時に見ている行動（同時注視）と，母子それぞれが相手を見る行動（相手を見る）の 2 行動であった。

身振り行動は母子それぞれが相手の注意や行動を方向づける身振り行動と，相手がそれに対して応じたかどうかで定義した。子どもから母親への身振り行動を「身振り・子」，母親から子どもへの身振り行動を「身振り・母」と設定した。身振り行動は対象の提示，手渡し，指さしの 3 活動から構成された。

コーディング

上記の観察カテゴリーにもとづき，行動記録分析装置(マイクロメイト岡山社製)を用いてマイクロ分析を行なった。視線行動については,「同時注視」も「相手を見る」も生起しない時間が生じる。このとき，母子は別々の対象を見ていることになる。コーディング・シェマを網羅的にするために，この時間間隔は「母子が別対象を見る」というカテゴリーとしてコーディングした。

評定者は，この研究の目的を知らされていない臨床心理学を専攻する大学院生であった。1 名の評定者（第 1 評定者）はすべての遊び場面について，カテゴリーごとに録画画面を視聴しコーディングを行なった。 もう 1 名の評定者は各母子の遊び場面のうち 20%の時間について，第 1 評定者と同様のコーディングを行なった。観察の信頼性を確かめるために，2 名の評定者の分析結果について κ 係数を計算した。そのとき，連続データであるマイクロ分析の結果を 5 秒間の時間間隔に分割し，1/0 サンプリング法によってデータを縮約した[注9]。上記の操作に基づき計算された各カテゴリーの κ 係数の範囲は，注視行動が.79 から 1.0，身振り・子，身振り・母を併せたものが.67 から 1.0 であった。

注 9　同一観察単位内に複数の注視行動カテゴリーが同時に生起する場合，各行動の生起順序が優先して表示されるように符号化した。たとえば，n-1 番目，n 番目，n+1 番目の観察単位内に，同時注視→母親が相手を見る／子どもが相手を見る→同時注視，という行動が生起した場合，同時注視（n-1 番目），母親が相手を見る（n 番目），子どもが相手を見る（n+1 番目）とスコアした。このスコア方法によって前後に生起したカテゴリー数が減少することになったが，対象となるカテゴリーは累積生起時間の長い同時注視であり，全体の相互作用の特徴を損なうものではないものと判断した。

結果と考察

Table 2 に同時注視の累積生起時間と相手を見る行動，身振り行動の生起回数を示す。同時注視の測度としては累積生起時間を用いた。それは，同時注視が全観察時間に占める割合が高く，かつ 1 回の同時注視は数秒以上持続することが多かったからである。それに対して，相手を見る行動や身振り行動については生起回数を測度とした。観察 1 で示されたように，これらの持続時間が同時注視の持続時間より短く，また，2 者間の相互作用にとって累積持続時間より生起回数の方に意味があると考えられるからである。

Table 2 同時注視の累積生起時間とその他のカテゴリーの生起頻度

		同時注視	相手を見る		身振り・子		身振り・母	
		（秒）	子	母	子→母	→子	母→子	→母
T児	16か月	497.5	2	21	8	8	37	28
	18か月	480.1	6	27	6	6	14	9
	20か月	442.3	20	31	7	7	14	10
K児	16か月	474.4	1	6	4	4	26	18
	18か月	392.6	3	24	16	16	14	8
	20か月	456.0	12	28	6	3	6	1

子→母，→子：子どもが母親に身振り行動を行い，それに母親が応答する。
母→子，→母：母親が子どもに身振り行動を行い，それに子どもが応答する。

同時注視の累積生起時間が全観察時間に占める割合は，2 組とも全月齢をとおして 70～80%であった（ただし，K 児の場合 18 か月での割合が 65%とやや低くなった）。このことから，この月齢での母子相互作用では同時注視が視線行動の多くを占めていることがわかった。相手を見る行動の回数は，母親では全月齢で 20～30 回であった（K 児では 16 か月時だけが少ない）。これは，母親が 1 分間に 2～3 回子どもを見ていることを示す。それに

対して，子どもが母親を見る回数は 16，18 か月のときに少なかったが，20 か月になると増加した。

身振り行動は視線行動とは異なる特徴を示した。すなわち，母親が行う身振り行動は子どもの加齢とともに低下した。それに対して，子どもの身振り行動は月齢間で差がなかった（K 児では 18 か月だけが多い）。したがって，16 か月時の母親の身振り行動の回数は，他の月齢よりも子どもの身振り行動の回数を大きく上回った。身振り行動への応答行動は母子間で差があった。つまり，母親は子どもの身振り行動に対してすべて応答したが(K 児の 20 か月での応答率は 50%)，それに対して，子どもが母親の身振り行動に応答する割合は約 60〜70%であった（一方，K 児の 20 か月では 6 回中 1 回（17%）と低かった）。

視線行動における子どもの注意配分の状態を，母子間で継時的に生起する視線行動を先行行動と後続行動の 2 事象の随伴関係によって分析した。事象の係数は，上記の 1/0 サンプリング法を用いて縮約したデータにもとづいている。Table 3 に連続して生起する 2 つの視線行動の生起頻度と調整残差（z 得点）（Bakeman & Gottman，1997）を示す。

「同時注視－子・相手を見る」,「子・相手を見る－同時注視」という 2 事象系列は生起頻度が少なく，母親と対象への注意配分の様相は明確にならなかった。しかし,「子・相手を見る－母・相手を見る」,「母・相手を見る－子・相手を見る」という 2 事象系列は，月齢による注意配分の様相の違いを示した。T 児の場合，18 か月になると，子どもが母親を見た後に母親が子どもを見る 2 事象系列の生起頻度が有意に高くなり，20 か月になると，さらにその上に母親が子どもを見た後に子どもが母親を見るという 2 事象系列の生起頻度が有意に高くなった。これに対し， K 児の場合, T 児と違って 16 か月のときにすでに「子・相手を見る－母・相手を見る」の生起頻度が有意に高かった。18 か月では,「母・相手を見る－子・相手を見る」の生起頻度が有意に高くなった。しかし,「子・相手を見る－母・相手を見る」の生起頻度はチャンス・レベルであった。20 か月になると「子・相手を見る－母・相手を見る」の生起頻度が有意に高くなったが,「母・相手を見る－子・相手を見る」の生起頻度は低くなった。

これらの分析から，次のことが明らかになった。観察カテゴリーの量的測度の結果は，すべての観察時期において母親は子どもを見る回数が多く，子どもからの身振り行動に対して確実に応答するという母親の行動特徴を示した。このような母親の行動によって，相互作用は維持されていたと考えられる。そして，相互作用を維持する母親の関わりは，観察時期によって変化する子どもの行動にも対応していた。すなわち，子どもが母親を見る

Table 3　視線行動における 2 事象系列（先行行動－後続行動）の生起頻度と調整残差の値

		T児								K児							
		後続行動								後続行動							
		同時注視		子・相手見る		母・相手見る		別対象見る		同時注視		子・相手見る		母・相手見る		別対象見る	
	16か月	頻度	残差	頻度	残差	頻度	残差	頻度	残差	頻度	残差	頻度	残差	頻度	残差	頻度	残差
先行行動	同時注視	74	1.50	1	−0.94	12	−2.03*	5	1.23	72	3.29**	1	0.59	2	−1.11	13	−3.15**
	子・相手見る	1	−0.94	0	−0.18	1	1.25	0	−0.29	0	−1.69	0	−0.10	1	5.72**	0	−0.53
	母・相手見る	14	−0.85	1	1.25	5	1.08	0	−1.03	1	−2.27*	0	−0.18	0	−0.37	3	2.63**
	別対象見る	3	−0.95	0	−0.29	2	1.42	0	−0.96	15	−2.14*	0	−0.53	1	0.16	10	2.32*
	18か月																
先行行動	同時注視	64	3.21**	3	−1.02	11	−2.73**	4	−0.69	49	2.74**	0	−2.13*	10	−1.51	12	−1.08
	子・相手見る	2	−1.93	0	−0.58	4	2.91**	0	−0.63	2	0.29	0	−0.29	1	0.68	0	−0.89
	母・相手見る	11	−2.73**	2	0.82	9	2.36**	2	0.57	6	−3.10**	3	3.79**	6	1.31	6	1.05
	別対象見る	5	0.15	1	1.16	0	−1.37	1	0.98	13	−0.52	0	−0.89	5	0.32	6	0.66
	20か月																
先行行動	同時注視	58	4.45**	9	−0.93	5	−4.34**	3	−0.68	57	4.72**	8	0.40	5	−5.20**	3	−1.26
	子・相手見る	2	−4.63**	0	−1.82	15	8.01**	0	−1.03	1	−3.98**	0	−1.22	11	6.02**	0	−0.92
	母・相手見る	11	−1.02	6	2.06*	2	−1.16	2	1.03	13	−1.85	4	0.84	8	4.16**	3	1.24
	別対象見る	3	−0.63	2	1.36	0	−3.79**	1	1.35	2	−1.7	0	−0.84	3	1.64	1	1.16

*p <.05, **p <.01

回数の少ない 16 か月時では, 母親は玩具に対する子どもの注意を喚起することによって相互作用を持続していたと推測される。この相互作用が，支持的な共同的関わりであると考えられる。20 か月になると，子どもが母親を見る回数が増加した。これは，子どもが玩具と母親の両方に注意を配分する状態になったことを示している。このとき，母親の身振り行動は減少した。このような母親の変化は，母親が相互作用を維持するために支持的に関わる必要性が低下したことに対応しているのであろう。16 か月から 20 か月へのこのような母子の行動の変化は，相互作用が協応的な共同的関わりへ変化したことを表している。

先行行動と後続行動の事象系列は，各行動間の推移確率として示すこともできる。量的指標の分析から明らかになった特徴を示す結果として，T 児の視線行動について，16 か月と 20 か月時の推移確率ダイアグラムを Figure 7 に示す。両月齢において，「同時注視」の後には「同時注視」が続く確率が高く（.80 と.79)，「別対象を見る」の後には「同時注視」が続く確率が高い（.60 と.50)。変化が見られる行動推移は「母が子を見る」に続く「子が母を見る」という行動系列であった。すなわち，16 が月時の.05 から 20 か月時には.30 に上昇した。このことは，母子間における視線のやりとりが増加したことを示しており，相互性が増した指標と考えられる。

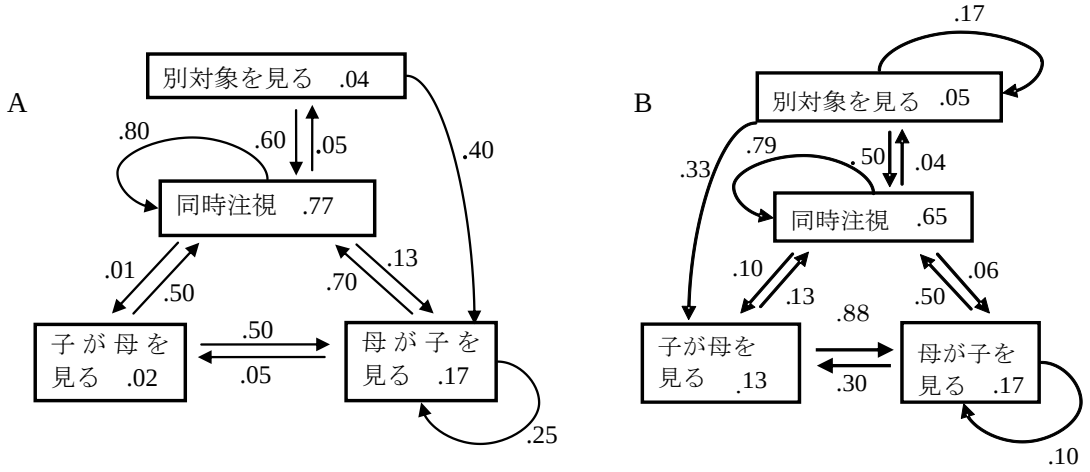


Figure 7. T 児における 16 か月時（A）と 20 か月時（B）の視線行動の推移確率ダイアグラム

Figure 8 に，2 つの視線行動の生起系列によって示された縦断的な変化にもとづく，2 組の母子相互作用間の差異を特徴的に表している相互作用のイベント・レコードを示す。Figure 8A は T 児の 16 か月時に観察された記録である。子どもは母親を見ることなく物を手渡した（75 秒 - 80 秒)。それに対して母親は，子どもを見てから手渡しするか玩具の提

示を行なった（80 秒 - 90 秒）。この場面以外では同時注視が持続していた。ここでは母親が子どもの注視対象や行動に注意を向けるという相互作用が成立していた。Figure 8B は T 児の 20 か月時の記録である。20 か月になると母子間における視線のやりとりが活発になった。子どもは母親が自分を見た後，見ている最中に母親を見た（230 秒 - 250 秒）。そして子どもが母親を先に見て，その視線のやりとりの最中に子どもから母親への身振り行動が生起した（275 秒 - 285 秒）。Figure 8C と Figure 8D は K 児の 20 か月時の記録である。同時注視が生起していないときに母親は子どもの方を見ながら身振り行動を行ない，子どもはそれに反応しなかった（Figure 8C ，220 秒 - 235 秒）。さらに，子どもが身振り行動を 2 回連続して行なったとき, 母子は相手と受け渡しされる対象を交互視することはなく, 3 回目の身振り行動に対して母親は応じず，K 児の顔をしばらく見たところでこのエピソードは終了した（Figure 8D，0 秒 - 25 秒）。

視線行動と身振り行動の時系列的な生起様相を表すイベント・レコードは，Table 2 と 3 で明らかになった相互作用の特徴をより具体的に示していると考えられる。T 児においては，16 か月では，子どもが母親に注意を向けることなく身振り行動を行なった場合であっても，母親は随伴的に反応していた。この調和的なやりとりは，母親が子どもの注意標的と子どもの行動に注意を向けていることによって成立していると考えられる。20 か月になると，子どもが母親と対象を交互に注視していること，そして，能動的に母親と対象に関わっていることが示された。

T 児母子とは対照的に，K 児母子の相互作用にはこのような視線行動と身振り行動の随伴的な生起が見られなかった。母親の身振り行動に対して子どもが応答しなかったとき（Figure 8C, 220 秒 - 230 秒）, 身振り行動が生起する前の数秒間において「別対象を見る」の状態が生起していた。このことから，K 児にとって母親からの関わりは唐突なものであったと推測される。さらに，K 児が身振り行動を示したとき，母子間での視線のやりとりは生起せず，母子が受け渡しされる対象だけを注視していた（Figure 8D，0 秒 - 25 秒）。K 児母子の相互作用がこのように不調和である理由として，2 つのことが想定される。ひとつは，Figure 8C に見られるように，同時注視が成立していない状況で母親が関わりを開始したことである。共同注意が成立していないときの子どもの遊びの発達水準は，それが成立しているときと比較して低いという Bigelow et al.（2004）の知見によれば，このときの K 児の活動水準は月齢に比して幼くなり, 玩具だけに注意を向けていたのかもしれない。しかし, 同時注視が成立していながら, 母親と玩具を交互に注視しなかったこと（Figure 8D,

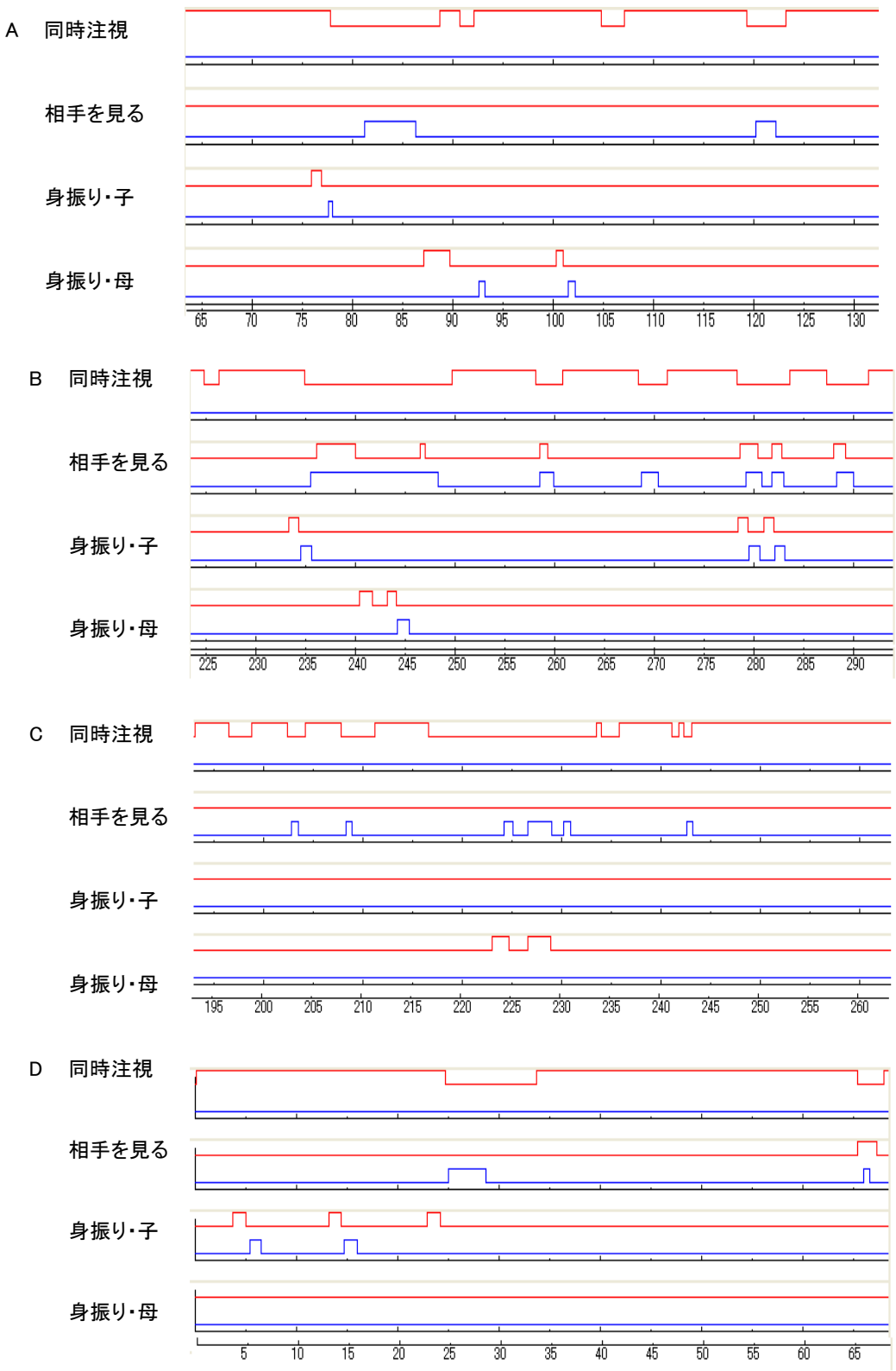


Figure 8.　イベント・レコードの結果(A : T 児 16 か月，B : T 児 20 か月，C : K 児 20 か月，D : K 児 20 か月)

・「相手を見る」，「身振り・子」において，上側の線分は子どもの行動を，下側の線分は母親の行動を示す。「身振り・母」ではその逆である。

・各パネルの最下段に示されている数字は，時間経過を表す秒数である。

0 秒 - 25 秒）から，この推測の正当性は低いと考えられる。

このことから想定されるもうひとつの理由は，母子の位置関係の問題である。通常，共同注意や共同的関わりを図示して説明するとき，母子は対面した状態に位置し，両者の中間に対象が置かれる（Tomasello，1999）。しかし，K 児母子の 20 か月時の相互作用では，母子は互いに腕を伸ばしても届かないほどの距離を置いて座り，さらに，母親は K 児の後方に座っていることが多く見られた。Figure 8D もそのような状態における記録である。この状況において K 児が母親の顔を見ようとすれば，上体をひねり，さらに顔を上方に向ける必要があった。この位置関係は，子どもが注意配分を行ないやすい「自己－対象－他者」という三項の配置ではない。この状態では，共同注意の構成要素である同時注視が生起することはあっても，もうひとつの構成要素である交互視（Tomasello，1995）が生起することは困難である。K 児母子の相互作用は，協応的な共同的関わり，あるいは，調和的な相互作用の成立要件として，母子が対象を介して互いにどのような位置関係にあるのかという問題を検討する必要があることを示唆している。

観察 2 では，母子相互作用の発達様相は，共同的関わりの時系列分析によってより正確に記述できることが示された。しかし，観察 2 は事例研究であった。観察 3 において，対象者の数を増やし，さらに，結果の分析方法を変えて，観察 2 で明らかになったことを確認する。

観察 3：母子間の相互応答性に注目した共同的関わりの分析

本観察では，観察 2 と同様に，共同的関わりを視線行動と身振り行動の 2 つの行動を用いて測定した。視線行動は，母子の同時注視と母子がそれぞれ相手を見る行動であり，対象に関わる行動は，母子がそれぞれ相手の注意を方向づける身振り行動と，この身振り行動に対する応答行動である。観察 2 では，共同的関わりは 20 か月のときに，支持的状態から協応的状態に変化することが明らかになった。本観察の目的は，母子それぞれの相手を見る行動と身振り行動が，相手からどの程度応答されるかという視点から，この変化を確認することである。

方法

観察対象者

観察対象者は 9 組の母子であった。子どもが 16 か月と 20 か月のときに縦断的な観察を

行なった。1 組の母子は 20 か月時に転居したために，観察を実施できなかった。したがって，本観察研究では 8 組の母子のデータを分析の対象とした。対象となった 8 名の子どもはすべて，乳幼児健診において身体発達と精神発達に関する問題の指摘はなかった。

8 組の母親の平均年齢は 31.4 歳（レンジ：28－34 歳）であった。2 回の観察時期における子どもの平均月齢は，それぞれ 15.9 か月（15 か月 6 日－16 か月 15 日）と 20.0 か月（19 か月 25 日－20 か月 5 日），子どもの性別は男女それぞれ 4 名であった。2 名の子どもは保育所に通っており，6 名は在宅児であった。

観察場面

保育所入所児の場合，保育所の一室において観察を行ない，在宅児の場合は，川崎医療福祉大学のプレイルームにおいて実施した。いずれの部屋においても，子どもが下記の玩具に注意を向けるようにするために，普段設置されている物品を子どもに見えないように片付けた。母子は玩具が配置された約 2m×約 3m の範囲の中で遊んだ。

観察者は 6 種類の玩具，（a）ままごとセット，（b）幼児用ブロック，（c）つまみを押す／回すと音が出る玩具，（d）形合わせ，（e）お絵かきボード，そして（f）形構成ブロックを準備した（付録参照）。その中から観察時期によって構成を変えた 4 種類の玩具を提示し，普段どおりに自由に遊ぶようにと母親に依頼した。

2 回の観察時期における 4 種類の玩具の構成は以下のとおりである。16 か月では（a），（b），（c），（d），20 か月では（a），（b），（e），（f）であった。このように構成したのは，（a）は両月齢でも母子のやりとりを促進する玩具であり，（b），（d）と（e），（f）はそれぞれの月齢児にとって操作が難しいために，母子間のやりとりを促進すると考えたからである。16 か月の（c），20 か月の（b）は子どもが単独でも操作可能であると考えた。

観察者は, 母子が遊んでいる様子を約 2m 離れた場所から HDD ムービーカメラを用いて録画した。15 分間の観察時間中，母子がこの状況に慣れた状態での遊び場面を分析対象とするために，遊び開始後約 2 分間が経過した後の 10 分間を分析対象として用いた。

観察カテゴリー

観察対象となったカテゴリーは，観察 2 と同じである。

視線行動は，母子が同じ対象を同時に見ている行動（同時注視）と，母子がそれぞれ相手を見る行動（相手を見る）の 2 行動であった。

身振り行動は母子それぞれが相手の注意や行動を方向づける身振り行動と，相手がそれに対して応じたかどうかで定義した。子どもから母親への身振り行動を「身振り・子」，母親から子どもへの身振り行動を「身振り・母」とした。身振り行動は対象の提示，手渡し，指さしの 3 行動から構成された。

これらの項目を用いたとき，支持的な共同的関わりは，子どもが母親を見ることと自ら母親に対して身振り行動を起こすことが少なく, 母親からの身振り行動が多い状態である。一方，協応的な共同的関わりは，子どもが母親を見ることと母親に対する身振り行動がともに増加し，母親への注意が明確になることによって，母親からの身振り行動に対して子どもがより応答的である状態として捉えることができる。

コーディング

上記の観察項目にもとづき，行動記録分析装置（マイクロメイト岡山社製）を用いてマイクロ分析を行った。視線行動については,「同時注視」も「相手を見る」も生起しない時間が生じる。このとき，母子はそれぞれ別の対象を見ていることになる。したがって，この時間間隔は「別対象を見る」という項目に該当するとみなした。

評定者は，この研究の目的を知らされていない臨床心理学専攻の大学院生であった。1 名の評定者（第 1 評定者）はすべての遊び場面について，項目ごとに録画画面を視聴しコーディングを行った。もう 1 名の評定者は各母子の記録のうち 20%の時間について，第 1 評定者と同じコーディングを行った。観察の信頼性を確かめるために，2 名の評定者の分析結果について κ 係数を計算した。その際，連続データであるマイクロ分析の結果を 5 秒間の時間間隔に分割し，1／0 サンプリング法によってデータを縮約した。この操作にもとづき計算された κ 係数の範囲は，注視行動が.79 から 1.0（M = .85），身振り・子，身振り・母を併せたものが.67 から 1.0（M = .96）であり，コーディングの信頼性は高いことが確認できた。

結果と考察

Table 4 に 8 組の母子の同時注視の累積生起時間，相手を見る行動，そして身振り行動の生起回数を示す。同時注視の測度には累積生起時間を用いた理由は，同時注視が全観察時間に占める割合が高く，さらに 1 回の同時注視は数秒以上持続することが多かったからである。それに対して，相手を見る行動と身振り行動については生起回数を測度とした。そ

の理由は，第 1 にこれらの 1 回の持続時間が同時注視の持続時間より短かったこと，第 2 に，2 者間の相互作用にとって累積生起時間より生起回数の方に意味があると考えたからである。

Table 4 同時注視の累積生起時間とその他のカテゴリーの生起頻度

	同時注視（秒）	相手を見る		身振り・子		身振り・母	
		子(先行，後続)	母	子→母	→子	母→子	→母
16か月	497.5	2(1, 1)	21	8	8	37	28
	450.4	13(12, 1)	32	3	3	21	18
	474.4	1(1, 0)	6	4	4	26	18
	403.9	6(5, 1)	45	4	4	27	7
	382.1	5(1, 4)	32	1	1	27	18
	264.2	12(8, 4)	82	6	6	24	20
	438.8	2(0, 2)	21	0	0	5	2
	543.5	1(1, 0)	3	1	0	8	5
20か月	442.3	20(13,7)	31	7	7	14	10
	473.6	14(11, 3)	29	3	3	15	12
	456.0	12(10, 2)	28	6	3	6	1
	344.5	6(4, 2)	22	3	3	23	16
	444.6	8(5, 3)	33	11	11	23	20
	521.4	10(9,1)	17	17	15	11	9
	388.3	32(28,4)	36	8	6	5	3
	458.5	0(0, 0)	32	10	9	10	8

子→母，→子：子どもが母親に身振り行動を行い，それに母親が応答する.
母→子，→母：母親が子どもに身振り行動を行い，それに子どもが応答する.

Table 4 が観察 2 の Table 2 と異なる点は，子どもが相手を見る行動を「先行，後続」に分類したことである。子どもが母親を見る行動には，子どもが母親を見る場合と，母親が子どもを見た後に子どもが母親を見る場合があった（それぞれの視線行動を先行行動，後続行動とし，ある視線行動が生起した後に，2 秒以上経過した場合，そのエピソードは終了したと定義した)。たとえば, 母親が子どもを見た後 2 秒以内に子どもが母親を見た場合，後続行動が生起したとスコアした。子どもの注意配分がより能動的になることが，共同的関わりの支持的状態から協応的状態への変化の指標であることが，この項目を設けた理由である。

16 か月と 20 か月時の同時注視の累積生起時間の平均値は, それぞれ 431.9 秒（*SD* = 84.80），441.2 秒（*SD* = 53.67）であった。すなわち，両月齢において同時注視は全観察時間のおよ

そ 70%を占めていた。母子が相手を見る行動について，月齢ごとに生起回数の差を符号つき順位検定によって調べた。16 か月，20 か月時ともに母親が子どもを見る回数は子どもが母親を見る回数よりも多かった（両月齢ともに $T = 0$，$n = 8$，$p < .01$）。各月齢での先行行動と後続行動の生起回数の差については，16 か月では両行動の生起回数間に差がみられず，20 か月では先行行動の生起回数が後続行動の生起回数よりも多かった（$T = 0$，$n = 7$，$p < .02$）。

母子が相手を見る行動と母子が相手に対して行う身振り行動の生起回数について，月齢間で生起回数の差の検定を行なった。子どもが母親を見る回数（$T = 4.5$，$n = 7$，*ns*），母親が子どもを見る回数（$T = 20$，$n = 8$，*ns*）ともに月齢間に差はなかった。子どもから母親への身振り行動の回数は，16 か月から 20 か月にかけて増加する傾向がみられ（$T = 3$，$n = 7$，$p < .10$），母親から子どもへの身振り行動の回数は減少した（$T = 1$，$n = 7$，$p < .05$）。

母子の相手からの身振り行動に対する応答行動は，相手からの身振り行動の生起に依存した測度である。したがって，反応数の月齢間での比較に加えて，各母子における相手の身振り行動に対する応答の比率も変化の重要な指標となる。Figure 9 に，16 か月から 20 か月にかけての母親／子どもからの身振り行動に対して，子ども／母親が応答した比率の変化を示す。

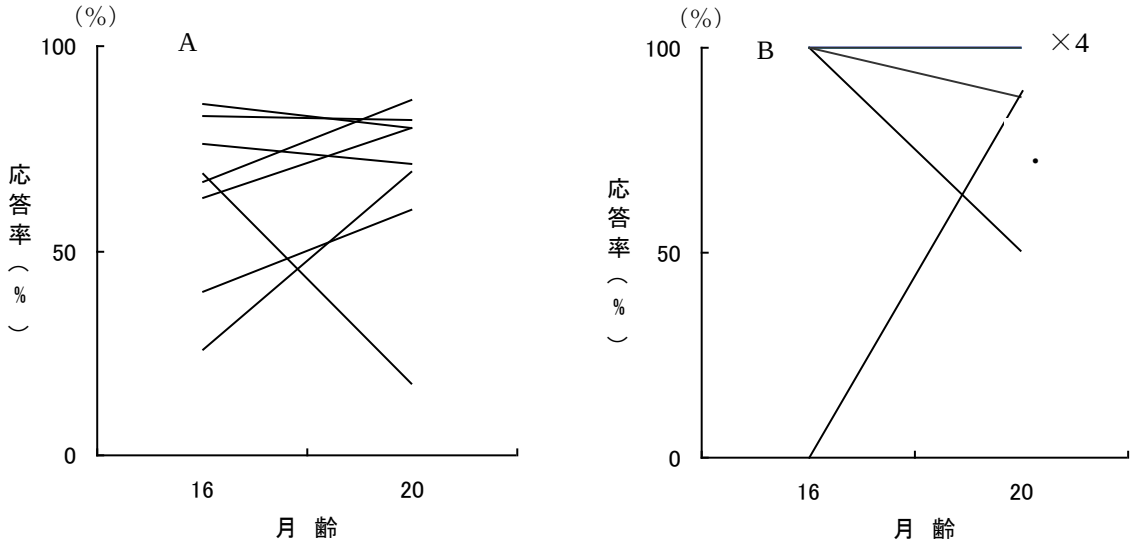


Figure 9. 16 か月と 20 か月における母親の身振り行動に対して子どもが応答した比率（A）と，子どもの身振り行動に対して母親が応答した比率（B）

子どもの応答率では，加齢に伴い上昇したものが 4 名，下降したものが 1 名であった。残る 3 名については，両月齢での応答率がおよそ 70～80%と高く，さらに月齢間の差が 1.5

～5.7 ポイントと小さかったことから，月齢間での変化がないとみなした。応答率が低下した 1 名の 20 か月時の応答率は 16.7%であり，この応答率だけがチャンスレベルを下回った。これらのことから，加齢に伴い応答率が低下する子どもは 1 名だけであるとみなした。応答率が低下する人数が少ないといえるかどうかを検討するために二項検定を行なったところ，その人数は少ないことが示された（p = .04）。

母親が子どもの身振り行動に対して応答した比率は，16 か月において 6 名が 100％であった。残る 2 名のうち 1 名は，1 回だけ生起した子どもの身振り行動に応答せず，残りの 1 名は子どもからの身振り行動が生起しなかった。すなわち，子どもから身振り行動が生起した 7 名のうち 6 名は，それに対して確実に応答した。この度数に関する二項検定の結果，確実に応答する母親が多い傾向がみられた（p = .06）。この 6 名のうち 4 名が 20 か月においても 100%であった。そして，16 か月時に応答行動を示さなかった 2 名の母親の 20 か月時の応答率は高い水準であった（それぞれ 75%，90%）。一方，加齢に伴い応答率が低下した母親が 2 名いた。このうち 1 名の場合，17 回の身振り行動に対して 15 回の応答行動を示しており，実質的な低下ではなかった。もう 1 名では，応答率が 100%から 50%に低下した（この母親は Figure 8A で応答率の低下を示した子どもの母親であった）。これらのことから，母親の身振り行動に対する子どもの応答率と同じく，子どもの身振り行動に対する母親の応答率が低下する人数は少ないことが示された（p = .04）。

これらの結果から，両月齢において相互作用中に同時注視の占める時間が多いこと，そして，母親が子どもを見る回数は子どもが母親を見る回数より多いことがわかった。このことから，同時注視は母親が子どもの標的対象を注意深く追従することによって成立していると推測できるであろう。さらに，両月齢において母親は，子どもからの身振り行動に対してほぼ確実に応答していた。相互作用の支持と維持のためには，母親が子どもの玩具への注意をひきつける行動（Bakeman Adamson，1984）だけでなく，子どもからの働きかけに随伴的に応答することも役立っていると考えられる。

16 か月から 20 か月にかけて，子どもの視線行動のうちの先行行動と身振り行動の回数が増加した。これらの変化は子どもが母親と玩具の両方へ注意をより能動的に配分するようになったことを示している。母親の行動は，このような子どもの行動の変化に対応していた。すなわち，母親の身振り行動の回数は 16 か月から 20 か月にかけて減少した。このことは，子どもの能動性の増加に応じて，母親が関わりを先導することを控えるようになったことを表していると考えられる。

子どもの視線行動と身振り行動の変化の様相が異なっていたことは，興味深いことである。すなわち，視線行動の生起回数は月齢間で変化はなかったが，先行行動と後続行動に分類して各月齢内での生起特徴を検討した場合，16 か月では両行動の生起回数に差はなく，20 か月になると，先行行動が後続行動よりも多く生起した。身振り行動では，16 か月から 20 か月にかけて生起回数が増加した。母親からの身振りに対する応答については，明確な変化は見出されなかった。Brooks & Meltzoff（2002）は，子どもの視線行動を指標として用いた他者の注視の意図の理解課題において，12 か月児と 18 か月児に成績の差はないことを示した。すなわち，子どもは早い時期から視線行動をとおして他者の意図を理解できるということである。本観察の結果は，視線行動にもとづく他者の意図の理解という文脈では，視線行動を用いて自分の意図を他者に伝える機能が，18 か月以降に明確になることを示唆している。

さらに，視線行動と身振り行動の発達経過の差について，Woodward（2005）によると，6 か月から 12 か月の乳児における，他者の指さしに対する定位反応と注視に対する定位反応の発達経過を比較すると，指さしに対する定位反応は注視に対する定位反応よりも遅れて出現する。Woodward の研究と本観察では，対象児も課題状況も異なる。したがって，単純に類推することはできないが，共同的関わりにおいても，視線行動と身振り行動の発達経過は異なることが推測される。

この観察の結果，この時期の共同的関わりにおける子どもの変化を次のように想定した : 16 か月までに，子どもは母親の視線行動と身振り行動の意図を理解している。20 か月までには，視線行動をとおして自分の意図を能動的に母親に伝えるようになり，それに伴い，身振り行動を多く用いるようになる。

研究 1 の総合考察

視線行動と身振り行動の量的測度の結果は，Bakeman & Adamson（1984）が示したように，母子間の共同的関わりは母親の支持的な関わりによって成立している状態から，子どもの能動的な注意配分が機能する協応的な状態へ発達することを示した。さらに，母子の行動の生起順序と応答行動に関する時系列分析によって，この時期に生起する子どもの行動の変化に応じて，母親の対応が変化することが示された。このことは，認知発達に伴って，子どもが相互作用においてより協調的な役割を果たすようになることは間違いのないことでありながら，母子相互作用の維持には，子どもの変化に即応した母親の変化が重要

な機能を果たしていることを意味している。この意味において，この時期の共同的関わりは，一貫して支持的な共同的関わりであるということができるであろう。

発達早期の母子相互作用は母子の双方向的な社会的交渉であり，それは養育者側の巧みな配慮に支えられて成立する（遠藤・小沢，2001）。本観察の分析は，母子相互作用の双方向性と養育者の配慮を，母子間での視線行動と身振り行動の随伴生起として捉えているといえよう。Figure 9 に示された 1 組の母子における相手からの身振り行動に対するそれぞれの応答率の低下は，相互作用の双方向性を明確に示す好例である。

第 3 章　研究 2：母子の位置取りと母子相互作用との関連
ー子どもの遊びの発達水準と相互応答性による分析ー[注 10]

乳幼児期の母子相互作用における，母子の行動的同期性や情緒的同期性，母親の子どもに対する応答性や共感性が，子どもの認知や社会性など広範な領域の発達と関連していることが多くの研究によって明らかにされている（Harrist & Waugh，2002）。それらの研究によると，子どもが生後 9 か月ころから 1 歳後半のとき，母子相互作用における母子間での注意の共有が，子どもの精神発達を反映する有力な指標である。

注意の共有は，子ども，母親，そして，両者が注意を共有する対象の 3 項から構成される関係の中で生起する。この現象の前提は，相手が注意を何に向けているのかを相互に特定することであり，その手がかりは，主に相手の視線方向である。この状況を図式的に説明するときには，子どもと母親が対面し，その間に対象が配置される（Tomasello，1999）。これは，母子が玩具などの注意共有対象を介してやりとりするとき，両者が互いの顔が見えるように位置することを示している。このことから，この時期の母子相互作用では，このような位置取りが典型的なものであると考えられる。

注意の共有に関するこれらの説明は，定型的な発達をしている子どもと，養育に関する問題のない母親との相互作用にもとづいたものである。それに対して，遊び場面での相互作用において，育児困難や気分変調を示す母親は統制群の母親と比べて，子どもとの注意の共有が少ないということが明らかにされている（Goldsmith & Rogoff, 1997；則内他, 2004）。同様の問題を示す母親とその子どもの観察例では，互いの顔が見えない配置，すなわち，子どもの背後に母親が位置する状態で子どもの遊びがおこなわれ，両者のやりとりには相互の応答性が欠けていることが認められた（清水，2007）。

Madigan, Hawkins, Goldberg, & Benoit（2006）は，混乱した育児行動を示す母親に対する治療的介入の項目のひとつとして，18 か月の子どもと関わるときの最適な体の向きと 2 者間の最適な距離の促進を取り入れた。治療の結果, 母親の子どもに対する感受性が増大し，混乱した行動は減少した。母親の育児行動を母子間の体の距離と向きの視点からとらえた。

注 10　本研究は,「母子の位置取りおよび相互応答性と母親の関わり方との関連（第 65 回中国四国心理学会，2009）」,「遊び場面における母子の位置取りと母子の行動との関連（小児保健研究，2011，vol.70）において，報告，発表した内容にもとづいている。

ただし，この研究では，どのような体の向きと距離が最適であるのかについては具体的に明らかにされていない。生後 5 か月間にわたる母子の視線方向と位置取りの関連を扱った研究（Fogel, Nwokah, Hsu, Dedo, & Walker，1993）では，顔を見合わせる状況において乳児が視線を逸らしたときに，母親は乳児の視線方向に乳児の体の方向を変え，乳児を自分に背を向かせて置く位置取りに変化させることが明らかにされた。これらの研究は，母子の位置取りが相互作用に関連していることを明確に示している。

本研究の目的は，母子相互作用における位置取りの役割を明らかにすることである。そのために，以下の 3 点について検討する。第 1 に，定型発達において，1 歳半ばの子どもとその母親との玩具を介した相互作用には，どのような位置取りがみられるのかを明らかにする。この年齢では三項関係がすでに成立していると想定され，理論上は，母子が互いの顔を見ることができ，かつ，両者が同時に玩具を見ることのできる位置取りが多くみられるであろうと予測される。第 2 に，母子の位置取りと子どもの認知的活動に関連が見られるかどうかを確認する。母子相互作用と認知発達との関連の指摘から（Harrist & Waugh, 2002），位置取りが最適である場合，注意の共有は促進され，その結果，子どもの認知的活動の発達水準は，そうでない子どもよりも高いことが予測される。最後に，位置取りによって，母親の関わり方に違いがあるのかどうかを調べる。注意の共有が容易な位置取りで関わるとき，母親は子どもの行動や興味の対象を確認することができるために，そうでない場合に比べて，子どもへの関わり方が適切であろうと予測される。そして，最適な相互作用が成立しているとき，母子相互の応答性も高まることが予測される。

方法

観察対象者

保育所あるいは児童館を利用している母親に対して，その職員をとおして観察対象者を募った。その結果，36 組の母子が観察に協力した。子どもの年齢は 18 か月から 20 か月であった。そのうち 1 名の子どもは観察中に泣いていたため，もう 1 名は設定状況の中で遊ばなかったために分析から除いた。分析の対象となった 34 名の子どもの平均年齢は 18.3 か月（SD = 0.7）であり，男女の数はどちらも 17 名であった。母親の平均年齢は 31.8 歳（SD = 4.0）であった。34 名の子どもは全員，乳幼児健診において精神発達，運動発達に関する問題の指摘はなく，母親から発達に関して心配なことの訴えもなかった。

観察対象者の募集は，保育所あるいは児童館を利用している母親に対して，その職員を

とおして行なわれた。観察前に，観察方法の説明と結果を学会や論文等で発表することを記載した文書を提示し，さらに口頭で説明した。対象となったすべての母親から同意を得ることができた。

観察場面

対象者のうち 2 名は保育所に入所しており, 他の 32 名は在宅児であった。保育所入所児の場合，観察は保育所の一室において実施され，他の子どもについては，川崎医療福祉大学のプレイルーム，あるいは，地域の児童館の一室において実施された。

観察者は 4 種類の玩具（ままごとセット, 幼児用ブロック， お絵かきボード, 形合わせ）を準備した。これらの玩具を提示し，普段どおりに自由に遊ぶようにと母親に依頼した。観察者は, 母子が遊んでいる様子を約 2m 離れた場所から HDD ムービーカメラを用いて録画した。10 分間の観察時間中，遊び開始後約 3 分間が経過した後の 5 分間の遊び場面を分析対象として用いた。

観察項目

母子の位置取り

母子の位置取りとして次の 4 型を想定し，その視点から分析した。（a）対面：母子が対面し，両者の間に玩具がある。（b）横並び：子どもは玩具に正対し，母親は子どもの横に並んでいる。（c）縦並び：子どもは玩具に正対し，母親は子どもの背後に位置する。（d）その他：（a），（b），（c）のいずれにも合致しない（Figure 10）。

注意の共有は，（a）においてもっとも生起しやすく，（b），（c）の順に生起しにくくなると考えられる。

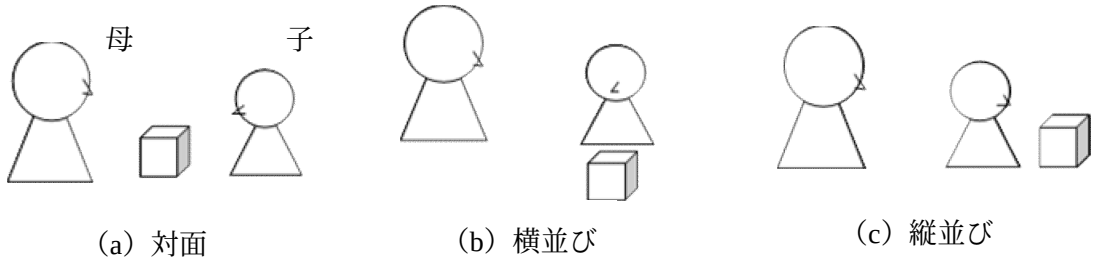


Figure 10. 母子の位置取りの概念図

子どもの遊び

Bigelow, MacLean, & Proctor（2004）にもとづき，子どもの遊びを次の 4 型に分類した。（a）適切関連づけ：2 個以上の玩具を慣例的な使い方で関連づける。（b）不適切関連づけ：2 個以上の玩具を非機能的に関連づける。（c）固定的：1 個の玩具を持っている，触れる，叩く。（d）遊ばない：玩具を手に持たない。遊びの基盤にある認知発達の水準は，（a）がもっとも高く，（b），（c）がそれに続く。

1 個の玩具のみを慣例的に使う場合もあるが（たとえば, ミニカーを押す）, 本研究では, それに対応する玩具が含まれなかったため，この項目を設定しなかった。

母親の子どもへの関わり方

観察場面をとおした母親の関わり方の全体的印象を，退避的と侵入的を両極とする基準でとらえ，退避的 1 点，やや退避的 2 点，どちらでもない 3 点，やや侵入的 4 点，侵入的 5 点，とする 5 件法を用いて評定した。退避的関わりとは，遊び交流の欠如，無関与，平板な表情と発話という特徴を示す関わりであり，侵入的関わりとは，遊びへの積極的あるいは統制的な関与, 非随伴的な応答という特徴を示す関わりである（Hart, Field, & del Valle, 1998）。どちらの特徴も顕著に示さない場合，すなわち，3 点の評価点を適正な関わりであるとみなした。

母子間の相互応答性

相互応答性の指標として, 社会的随伴性の二者間測度である three-turn sequence を用いた（Raver，1996）。これは，母親が子どもにはたらきかけをした後，子どもがそれに応じ，さらに，それに対して母親が反応するという一連の行動連鎖である。この連鎖が成立したとき，このときの母子のやりとりは相互応答的と判断される。

コーディング，評定

上記の観察項目のうち，母子の位置取り，子どもの遊び，そして，母子間の相互応答性については，行動コーディングシステム PTS-113（ディケイエイチ社製）を用いマイクロ分析をおこなった。母子の位置取りと子どもの遊びの測度は各行動の累積生起時間であり，母子間の相互応答性の測度は生起回数であった。

評定者は, この研究の目的を知らされていない 2 名の臨床心理学専攻の学部生であった。

1 名の評定者（第 1 評定者）はすべての遊び場面について，項目ごとに録画画面を視聴しコーディングを行なった。もう 1 名の評定者は 7 組の母子（全体の 20.6%）について，第 1 評定者と同じコーディングを行なった。観察の信頼性を確かめるために，2 名の評定者の分析結果についてκ係数を計算した。この 7 組を対象に算出したκ係数の範囲は,「母子の位置取り」では 0.90－1.00,「子どもの遊び」では 0.71－0.83,「母子間の相互応答性」では 0.70－0.88 であり，いずれの項目においてもコーディングの信頼性が確認できた。

「母親の子どもへの関わり方」では，2 名の評定者がすべての対象者について評定した。両者の評定値が異なったのは 3 組であった。この 3 組については，両者が協議をして評定値を一致させた。

結果と考察

母子の位置取り

各母子が各位置取りの状態にあった累積生起時間の分布の類似性によって母子の分類をするために，クラスター分析をおこなった。その結果，34 組の母子は 5 つのクラスターに類型化された。そのうち構成数が 1 組であった 1 つのクラスターを除く 4 つのクラスターについて，各位置取りの平均累積生起時間を求めた（Table 5）。各位置取りの累積生起時間の分布から，クラスターA，B，C，D をそれぞれ，対面優位，横並び優位，縦並び優位，混在と命名した。

Table 5 各クラスターの構成組数と各位置取りの平均累積生起時間

		位 置 取 り							
		対面		横並び		縦並び		その他	
クラスター	組数	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
A	11	287.6	17.3	12.0	16.8	0.5	1.5	0.0	0.0
B	8	80.6	77.1	199.7	88.0	3.7	9.1	4.3	7.5
C	11	1.2	3.8	27.6	43.4	269.4	41.7	2.0	2.8
D	3	215.2	51.5	28.3	49.1	14.0	24.3	42.6	12.4

平均累積生起時間の単位：秒

母子の位置取りと子どもの遊びとの関連

各クラスターに属する子どもが，4 種の遊びにそれぞれに費やした平均累積生起時間を

Table 6 に示した。この時間を従属変数として，クラスター（4）×遊び（4）の 2 要因分散分析をおこなった結果，遊びの主効果だけが有意であった（F（3, 9）= 10.35, p<. 01）。本研究では交互作用が検討対象であるため，遊びの主効果に関してこれ以上の分析を行なわなかった。

Table 6 各クラスターにおける各遊びの平均累積生起時間

	遊　び							
	適切関連		不適切関連		固定的		遊ばない	
クラスター	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
対面優位	88.9	41.5	80.0	70.3	115.4	38.0	24.4	32.1
横並び優位	92.1	56.3	46.2	43.3	117.2	33.2	50.2	50.1
縦並び優位	100.7	55.0	79.6	47.4	98.5	46.5	25.7	27.9
混在	70.1	31.7	51.6	46.0	137.1	53.5	47.3	12.7

平均累積生起時間の単位：秒

母子の位置取りと母親の子どもへの関わり方との関連

母子の位置取りと母親の子どもへの関わり方の関連に関する分析では 34 組すべてのデータを用いた。位置取りの形態によって，母親の子どもへの関わり方の適切性が異なることを示すために，各位置取りとそのときの子どもへの関わり方の関連は 1 次関数的か 2 次関数的であるのか，という観点から調べた。すなわち，4 種の位置取り累積生起時間を目的変数，母親の子どもへの関わり方（退避的－侵入的）を予測変数とする回帰分析を，各累積生起時間においておこなった。その結果，横並びとその他の位置取りにおいては，母親の関わり方はその位置取りの累積生起時間を，1 次，2 次いずれの回帰式によっても説明することはできなかった。一方，対面と縦並びでは，それぞれ 2 次の回帰式の適合度が有意であった：対面　$\hat{Y}$＝-279.1+298.1X-47.6X^2（自由度調整済み R^2＝ 0.14；F（2, 31）＝ 3.62, p < .05），縦並び　$\hat{Y}$＝429.5-283.4X+51.2X^2（自由度調整済み R^2＝ 0.21；F（2, 31）＝ 5.33, p < .05）。これらの回帰曲線を Figure 11 に示す。

次に，母親の子どもへの関わり方を予測変数，three-turn sequence の生起回数を目的変数とする回帰分析をおこなった。その結果，1 次，2 次の回帰式のどちらの適合度も有意であったが（$\hat{Y}$＝-0.6+1.1X，F（1, 32）＝8.81，p < .01； $\hat{Y}$＝4.5+4.1X-0.5X^2，F（2, 32）＝5.83, p < .01），各式の自由度調整済み R^2 の値は 0.19 と 0.23 であり，2 次の回帰式が 1 次の回帰式よりも適合度が優っていた。Figure 12 にこれらの回帰直線と回帰曲線を示した。

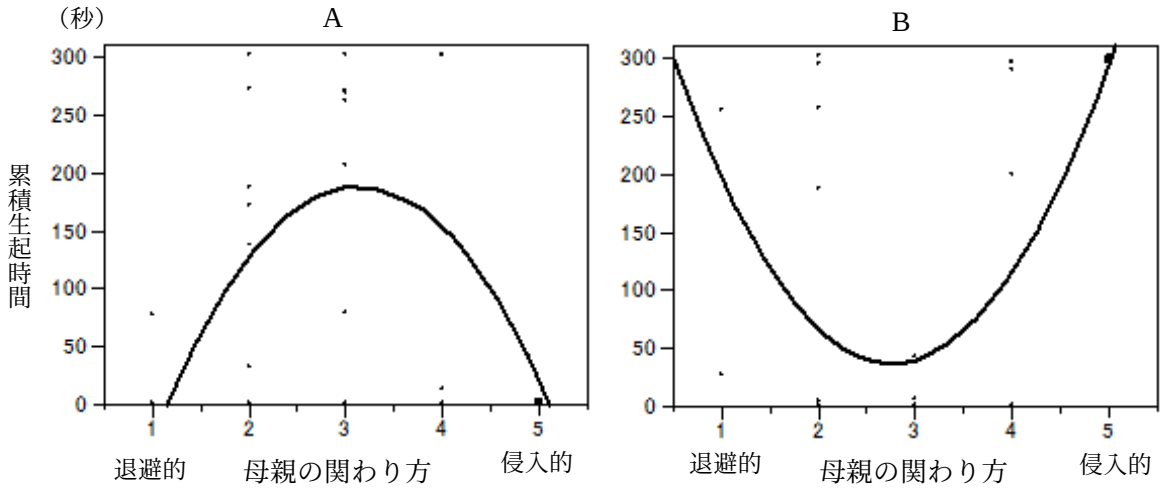


Figure 11. 対面（A）と縦並び（B）の位置取りと母親の関わり方との関連

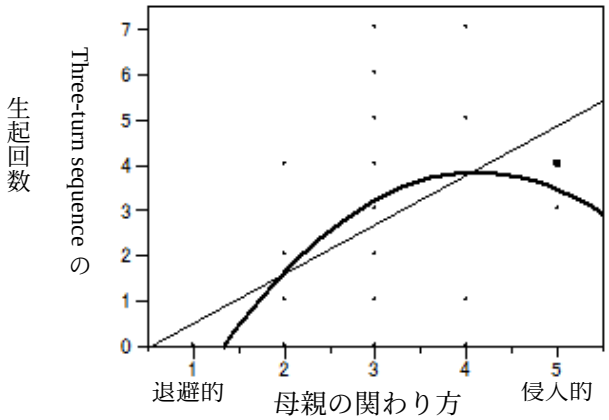


Figure 12. three-turn sequence の生起回数と母親の関わり方との関連

最後に，母子間の相互応答性の指標である three-turn sequence の生起回数について（Table7），クラスターを要因とする 1 要因分散分析をおこなった。その結果，要因の効果が有意であった（F（3, 29）＝5.68, p < .01）。Tukey 法による多重比較の結果，対面優位の three-turn sequence 生起回数が，横並び優位，縦並び優位よりも多かった（ps< .01，標準誤差＝0.93，0.85）。

Table 7 各クラスターにおける three-turn sequence の平均生起回数

クラスター							
対面優位		横並び優位		縦並び優位		混在	
平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
4.4	2.6	1.8	1.9	1.0	1.3	3.0	1.7

本研究では，第 1 に，母子が玩具を介してやりとりするとき，どのように位置取りするのかということの確認を試みた。その結果，主な位置取りは対面優位，横並び優位，縦並び優位であることが明らかになった。臨床的な問題のない本研究の対象者においては，対面優位が多くの母子に認められると予測したが，母子間での視線のやりとりが難しく，したがって注意の共有が生起しにくい縦並び優位の母子が対面優位と同数の 11 組であった。これは全体の 33.3%を占めている。さらに，横並び優位は 8 組であり全体の 24.2%を占めていた。これらのことから，定型発達群において多様な位置取りのあることが明らかになった。

母子が注意対象を容易に同時に注視できるという点において，横並びは対面と類似した位置取りである。しかし，両者は互いの顔の見やすさの程度において異なる，すなわち，横並びにおいては対面よりも難しい。やまだ（2005）は，対面位置での三項関係では，自己と他者は対面し，モノを媒介としてやりとりする対話的関係がつくられるのに対して，並ぶ関係では,「ここ」という場所に共存し，自己の関心が他者と共同化されると述べている。本研究の対象となった子どもの年齢時期では，位置取りの決定への寄与の程度は母親の方が大きいと考えられることから，母親の遊びに対する志向性によって，すなわち，やりとりを求めるか情動共有を求めるかによって，対面優位か横並び優位が選択されるのかもしれない。

位置取りクラスターと子どもの遊びの関連を見出すことはできなかった。Bigelow et al.（2004）によれば，2 個以上の玩具を慣例的な使い方で関連づける適切関連づけ遊びが認知発達的にはもっとも高い水準にある。しかし，本研究では，最適な位置取りと考えられる対面であっても，他の位置取りに比べて遊びの水準が高くなるという結果は得られなかった。Bigelow et al.（2004）は，母親の関わりと，本研究と同時期の子どもの遊びの水準の関連性を調べるために，実験的操作として，母親が子どもの遊びに普段通りに関与する場合と，子どもからのはたらきかけがあるまで関与せず，関与したとしても最小限に留める場合という 2 条件を設けた。したがって，普段通りとそうではない相互作用の差異が明確であった。それに対して本研究では，母親に普段通りの関わりを求めた。このような観察条件の違いから異なる結果が生じた可能性が考えられ，今後の検討が必要である。

退避的か侵入的かという視点による母親の関わり方と位置取りの関連においては，いくつかの知見が得られた。すなわち，対面での累積生起時間が多い組ほど，その組の母親の関わり方は退避的でも侵入的でもないと評価される傾向があった。それに対して，縦並び

の累積生起時間では, それが多い組ほど退避的あるいは侵入的と評価される傾向があった。対面と縦並びは，母子間での注意の共有のしやすさという点からは，対立的な位置取りである。縦並びのとき，母親は子どもの注意対象を確認できないし，表情を見ることもできない。したがって，関わりを開始した場合，子どもの関心や要求と一致しない可能性が高くなる。その状況において関わりを続けたとき，侵入的であると評定されるのであろう。関わりを開始せずに子どもの様子を背後から見ていることが増えれば，子どもの活動に関心を示さず，退避的であると評定されるのであろう。

このことは，three-turn sequence との関連においても示されている。相互応答性の指標である three-turn sequence の回数は，母親の関わりが多くなるほど増加した。しかし，それが侵入的であると評定される場合には，かえって生起回数が低下するとみなすことも可能であった。育児不安の高い母親の子どもへの関わり方を調べた研究では，母親の子どもの遊びへの積極的な参加は多かったが，子どもの自発的活動を引き出す配慮的関わり，賞賛や励まし行動は少なく，直接的な統制行動の多いことが示された（輿石，2002）。これは，子どもの状態を無視した関与，すなわち，配慮に欠けた参加は侵入的になることを意味しており，Figure 12 の示していることと一致している。

さらに，three-turn sequence の生起回数にクラスター間で差がみられたことは，母子が注意の対象を同時に見るだけではなく，互いの顔を見ることも可能であることによって，相互応答性の程度が高まることを表している。

本研究では，子どもの遊びの発達，母親の関わり方，そして，母子間の相互応答性における，母子相互作用時の母子の位置取りの役割を明らかにすることを試みた。子どもの遊びの発達との関連については検討すべき課題が残された。母親の関わり方，母子間の相互応答性については，位置取りとの関連性がみられ，母子が互いの顔を見ることのできる対面位置でのやりとりが，より適切な母子相互作用につながることが確認できた。

第 4 章　総合考察

第 1 節　母子相互作用の発達

研究 1 と 2 において，母子相互作用を時系列的な事象と捉え，マイクロ分析によって，その様相を分析した。注目した相互作用の側目は，共同的関わりであった。研究 1 の理論的, 方法論的基盤は, 以下の 3 つの研究に大きく依存している;(1)Stern（1971）と Trevarthen（1979）による，母子相互作用における行動の即時的な記録と，行動間の随伴的な関係を抽出した研究,（2）Bakeman & Adamson（1984）と Adamson et al.（2004）による，共同的関わりという母子相互作用の重要な様相を指摘した研究，そして,（3）Tomasello（1995）と Carpenter et al.（1998）による，共同注意を構成する行動要素に分割した研究。

研究 1 において，乳児期から toddler 期までの母子相互作用の発達を，共同的関わりの視点から分析した。研究 1 によって明らかになったことは，第 1 に，マイクロ分析と共同的関わりにもとづく観察カテゴリー・システムによって，母子相互作用の特徴をうまく表現することができるということである。たとえば，観察 1 の Table 1 では 2 組の母子の相違が示され, 観察 2 では, Figure 7 の推移確率ダイアグラムに月齢間差が, Figure 8 のイベント・レコードに 2 組の母子の相違が明確に示された。第 2 に，共同的関わりが支持的状態から協応的状態へ発達することが，それを構成する行動要素によって数量的に示すことができた（Table 3)。さらに，観察 3 では，相互作用の維持のために，母親が子どもの注意の標的対象に注意を向けること，そのことを基盤として，子どもからの身振り行動に確実に応答することの重要性が明らかになった。さらに，子どもの能動性の上昇という発達的変化に応じて，母親は相互作用における先導的役割を減少させるということも明らかになった。

これらの研究が示す相互作用の調和的な維持のための要件は，幼児期初期までの母子相互作用が，基本的に母親の支持によって成立することであると考えられる。この理由を Figure 5 に求めることができる。発達的に遅く出現する協応的関わりの比率は，15 か月から 18 か月にかけて著しく増加する。注目すべきことは，支持的関わりがその時期に減少していないということである。すなわち，支持的関わりの比率は，観察期間をとおしてほぼ一定の数値で推移している。相互作用の維持のためのもうひとつの要件は，子どもの発達的変化に応じて母親の対応も変化するということであった。この結果は，本研究が明らかにした重要な結果である。ここで示されていることは，Schaffer（1999）が論じた相互作用の双方向性を実証的データによって検証した。

研究 2 は，研究 1 の結果から検討課題として浮上した問題，すなわち，母子相互作用が生起するときの母子間の物理的な位置取りと母子相互応答性と子どもの遊びの関連を扱った。位置取りに関する先行研究がほとんどなく，探索的な研究であった。予測に反して，非臨床群の母子においては，対面での相互作用が多く見られるいという結果を得ることはできなかった。ただし，母親の関わり方において，対面と縦並びには正反対の特徴があった（Figure 11）。すなわち，対面で遊んでいるとき，母親の子どもに対する関わり方は適正と判断され，縦並びの場合，退避的，あるいは，侵入的と判断された。研究 2 の契機となった研究 1･観察 2 の K 児母子に関する不調和な相互作用の記述と, この結果は一致する。さらに，関わり方と相互応答性には関連があった。関わりが少なすぎても，反対に，多すぎても，相互応答的にはならないという結果は（Figure 12），母親が支持的に，そして，随伴的に関わることの意義を確認するものとなった。

第 2 節　母子相互作用と子どもの社会性発達との関連

子どもの年齢が増すにつれて，子どもが示す様々な言動と母親の言動との直接的で即時的なつながりを見つけることは困難になる。したがって，幼児期初期までの母子相互作用の特徴によって，幼児期中期から後期における子どもの社会性発達の状態を説明することには慎重でなければならないであろう。この点に関して，自己制御は気質のひとつであり（Rothbart & Bates，2006），それを支持する結果として，認知課題で示される能力のような加齢に伴う水準の向上が見られないことが示されている（清水，2012a）。そして，このような自己制御の個人差を説明する変数として，子どもが示す恐れやすさの程度が提起されている（Kochanska et al.，2001；Ursache, Blair, Stifter, & Voegtline，2013）。

しかしながら，母子相互作用が子どもの発達と関連していることは間違いないことである。本研究では，toddler 期までの母子相互作用と，その発達的帰結である社会性発達，その中でも主要な能力である自己制御の発達を理論的につなげることを目指した。そのための有用な概念として, 足場（Wood, Bruner, & Ross, 1976）, 母子間相互反応志向性（Kochanska et al.，2005），そして，共制御（Conway & Stifter，2012）を位置づけた。さらに，行動水準において測定可能である共制御を，toddler 期と幼児期の母子相互作用が子どもの社会性発達に関連する概念であると想定した。このような想定をしたのは，大人の支援によって子どもの自己制御の発達を促し，あるいは，自己制御に関する臨床心理学的問題を抱える子どもに対する，発達心理学的に合理的な支援法を提起できると考えられるからである。

自己制御の発達が reactive な状態から effortful な状態に発達する（Eisenberg et al., 2010）ということは，母親の支持が発達初期には大きな意義を有し，それが発達とともに徐々に減少するということを意味している。子どもの能力の発達過程における母子の役割という点において，これは，共同的関わりが支持的状態から協応的状態に発達するという様相と全く一致している。すなわち，異なる発達課題における母子の役割が，toddler 期をはさんで螺旋的に発達的に変化していると考えられる。加齢とともに子どもが自律性を獲得し，母親から独立して行動するようになる。しかしながら，effortful な状態に移行したばかりの幼児期の自己制御においては，協応的共同的関わりの基盤に支持的共同的関わりが存在することと同様に，母親による支持が大きな意義をもっていると考えられる。Conway & Stifter（2012）が示す結果がこの推論の根拠である。

生後 3 年までの気質特徴の安定性は，自己制御システムの reactive な側面が優勢であるために，effortful な側面が発達するそれ以降の安定性に比較して低い（Rothbart & Bates, 2006）。この事実は，乳児期の特徴がその後に変化することを意味している。しかし，このことは，3 歳以前の大人の関わり方がどのようなものであっても，その後の子どもの自己制御の発達様相と関連しないということを意味してはいない（Conway & Stifter，2012）。

第 3 節　母子相互作用と社会性発達に関する臨床心理学的問題

研究 1 と 2，および，Conway & Stifter（2012）から，子どもの変化に応じて母親が自分の行動を変えることができないことは，母子相互作用に不調和を発生させる要因のひとつになるのではないかと推測される。不調和の要因に関連する母親の行動特徴には，子どもの行動に対する一貫性に欠けた応答（Cerezo & D’Ocon，1999）や，子どもとの注意の共有の少なさ（Goldsmith & Rogoff，1997；則内他，2004）がみられる。

藤崎・木原（2010）が挙げた「気になる問題」の項目のうち，自己制御と関連する問題は 3 歳以降に現れている。この理由は，子どもの他者との関わり方の特徴から，以下のように推測される。自己制御の reactive な側面の特徴にみられるように，乳児期における主要な社会的関わりは大人との 2 者間で生起する。その関わりにおいて，大人は子どもの理解の程度や興味に合わせて行動する，すなわち，子どもの発達を支える足場を提供する（Wood et al.，1976）。したがって，子どもが対人交流の困難性に関連する行動特徴を有していたとしても，養育者がその困難性が最少になるように自己の関わり方を調節させた場合，その結果として，2 者間の相互作用には大きな問題が生じないかもしれない。たとえ

ば, 物音に過敏であれば静かな環境を提供し, ぐずりやすければ多くあやすかもしれない。あるいは，養育者側の調節が不十分であったとしても，難しい気質は養育の難しさとして養育者に捉えられるであろう。そして，この時期に子どもが表出できることばと粗大運動の制限のために，社会適応に関する問題行動としては顕在化しないであろう。

その後の 3 歳から 4 歳にかけての発達課題は，母親との愛着を基盤として外界への探索活動を開始することである（Prior & Glaser, 2006）。この時期になると，多くの子どもは集団保育の場に参加するようになる。そこでは，大人に足場を提供してもらう二者関係に加えて，同年齢児との対等な仲間関係が始まる。これは，他者から自己に調節してもらう相互交流に，自己を他者に調節する相互交流が加わることを意味している。この時期は，自己制御が発達する時期と符合している。すなわち，自己制御の発達につまずきを示す子どもにとって，同年齢児との交流は，このつまずきが社会適応のつまずきとして顕在化する契機になる可能性をもっていると考えられる。

このように，子どもが出会う課題とそれへの子どもの対応は，toddler 期を境に異なる様相を示す。しかし，社会性発達という点において，乳児期とそれ以降の時期はつながっている。すなわち，幼児期と児童期における外在化問題行動の傾向は，生後 6 か月時の気質的特徴（欲求不満耐性の低さ，体内リズムの不規則性，見知らぬ人や場所への恐れ）に起源を求めることができる（菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井，1999）。さらに，乳児期における高水準の怒りの強さと低水準の喜びは, 幼児期の低い努力統制（自己制御の effortful な側面）と関連している（Kochanska & Knaack，2003）。これらの結果から，乳児期において社会適応の問題が顕在化していない場合であっても，自己制御の reactive な側面に注目し，適切に対応することの意義が示唆される。

Spinrad, Eisenberg, Silva, Eggum, Reiser, Edwards, Iyer, Kupfer, Hofer, Smith, Hayashi, & Gaertner（2012）の縦断研究においては，30 か月時の母親による感受性があり暖かい養育が，42 か月時における子どもの高い努力統制と低い衝動性を予測することが示された。さらに，菅原他（1999）は，児童期の外在化問題行動の出現に寄与する要因は，母親の乳幼児期の子どもに対する否定的感情と暖かさに欠ける養育態度であることを明らかにした。

一方，外在化問題行動とは反対の性質をもつ内在化問題行動（過度の不安，恐怖，抑うつ）（菅原，2003）においても，養育と自己制御には関連がある。この場合，自己制御の水準が高すぎることが問題になる。この傾向は行動抑制性とよばれ，幼児期初期から児童期にかけて連続性のあることがわかっている（Kagan, Reznick, & Snidman，1988）。行動抑制

性とは，ある対象や事象に接近することが適応的な場合であっても，回避傾向を意図的に抑制することがうまくできない性質である。すなわち，強い回避傾向があるときに，ある行為を実行するという点において，内在化問題行動も自己制御の能力を反映していることになる（Eisenberg et al.，2010）。そして，この行動抑制性に加えて，effortful にも行動を抑制的に統制できる子どもは失敗を過度に気にし，社会的文脈において自分の行為を評価するために, 不安症状を示しやすくなる（White, McDermott, Degnan, Henderson, & Fox, 2011）。

内在化問題行動においても，養育との関連がある。すなわち，権威のある養育スタイル（暖かく関与的である，期待を明確に伝える，全般的に快適である）を提供することが少ない母親の子どもでは，幼児期初期から青年期前期にかけて継年的に内在化問題行動が増加する（Williams, Degnan, Perez-Edgar, Henderson, Rubin, Pine, Steinberg, & Fox，2009）。外在化問題行動と内在化問題行動に関するこれらの結果は，幼児期初期における母親の関わり方が，子どものその後の自己制御に影響することを示している。

母親と乳児のやりとりの特徴は，母親も子どもも相手が行なったことに反応し，相手の周期的行動に対して持続的に動作を同期させるという双方向的な応答性を示すということである（Adamson, 1996）。Conway & Stifter（2012）はこの特徴を共制御で概念によって表した。共制御の観点から外在化／内在化問題行動と養育の関連に関する研究に示されていることをみるとき，母親が子どもに自己制御のための共制御を実行する（あるいは，実行しない）ときにも，母親は子どもの特徴の影響を受けることを意味しているであろう。菅原他（1999）は，生後 6 か月時と 18 か月時の子どもの外在化問題行動が，それぞれ 18 か月時と 5 歳時の母親の子どもに対する否定的感情に影響することを示した。これらのことから，乳児期の母子相互作用における共制御という現象が母子相互作用の不調和が子どもの社会性発達につながっていると想定することは妥当であろう。

第 4 節　自己制御の理論にもとづく発達支援

前節までの議論によって，幼児の社会性発達を育成するためには，自己制御の発達の視点が有効であること，そして，幼児期の社会的適応は乳児期から連続した現象であることが明らかになった。したがって, この節においても乳児期における検討から議論を始める。

乳児期の子どもにとって主たる他者は母親であることから，社会的適応に関してこの時期に重要な要因は，子どもが健全に発達するために欠かせない母親の機能である。情動発達の観点においては, 情動調律（Stern, 1985）, 感受性のある応答性（Prior & Glaser, 2006）,

そして，情緒的利用可能性（Biringen，2000）がそれに相当する。母親の子どもに対する関わりは，回避的でも侵入的でもよくない。これらが最適に機能すると子どもの情緒は安定し，外界に対する積極的な探索行動が生起する（Mulphurs，Field，Larraine，Pickens，Pelaez-Nogueras, Yando, & Bendell，1996）。認知的側面の発達においては，乳児が発する社会的な合図行動（たとえば，大人を注視しているときに生じる発声）に対して，大人が随伴的に反応することが乳児の注意持続と語彙獲得につながる，という結果が示されている（Dunham & Dunham，1995）。これらの結果から読み取れることは，双方向的な母子相互作用を前提としながらも，乳児期は子どもの諸機能の未発達な時期であることから，子どもが自己制御を達成するためには，大人の役割が重要であるということである。情動的側面と認知的側面の両側面において，母親から提供される足場によって，子どもの自己制御は母親による外的な制御，すなわち，reactive な状態から子ども自身による effortful な制御に発達すると考えられる。

乳児期におけるこのような自己制御の発達に失敗したとき，幼児期において外在化問題行動が生じることになるのであろう。ここで留意するべきことは，この失敗をすべて母親の対応の失敗に帰属させることはできないということである。なぜなら，気質的な難しさに加えて，高い衝動性という気質が重なった場合に，外在化問題行動が起こりやすくなる（Eisenberg et al.，2001）からである。外在化問題行動の発達において，負の情動性という気質的に難しい特徴をもつ子どもは，そうではない子どもと比べて環境の影響を受けやすく，母親の良くないしつけも良いしつけもどちらの影響を受けやすいことがわかっている（Mesman, Stoel, Bakemans-Kranenburg, van IJzendoorn, Juffer, Koot, & Alink，2009；van Zeijl, Mesman, Stolk, Alink, van IJzendoorn, Bakermans-Kranenburg, Juffer, & Koot，2007）。さらに，外向性という気質をもつ子どもに対して，ネガティブな（厳しい，侵入的，敵対的）養育が提供された場合には外在化問題行動が生起しやすく，ポジティブな（優しい，暖かい）養育が提供された場合には外在化問題行動につながらないという（Rothbart & Bates, 2006)。これらの研究が示していることは，気質的に難しい子どもの場合，そうではない子どもに比べて適切な養育環境の提供がより重要になるということである。

このように，乳児期においてどのような養育が子どもに提供されるかが，子どものその後の社会的適応に強く関与している。そして、家庭における養育の帰結としての社会的適応は，幼稚園や保育所における他児との交流において，自己制御が健全に機能しているかどうかというという側面において試されることになる。そのような状況において，自己制

御の発達不全のために，幼児期において他児との関わりの中で問題が生じたとしても，その子どもと養育者との二者関係の改善だけに頼ることはできないであろう。その理由のひとつは，この失敗をすべて母親の対応の失敗に帰属させることはできないからである（Mesman et al.，2009；van Zeijl et al.，2007）。もうひとつは，同年齢児との相互作用場面において適切とみなされる個々の対応の仕方を，子どもは直接的に学ばなければならないからである。このことに関して久保（2010）は，幼児期の子どもの情動制御の発達を支える生活の場として，幼稚園や保育所の役割を指摘している。そこでは，保育者によるはたらきかけと他児によるはたらきかけが存在するが，久保（2010）はそのなかでも後者を重視している。子ども同士の交流で生じる葛藤場面の経験は，情動を適切に制御し表現する貴重な機会となる。そこには大人を相手とする情動制御とは異なり，互いに相手の気持ちを斟酌するとは限らない。このことが，対人交渉を学ぶ貴重な練習の場を提供することになるという。一方，森田（2004）は，子どもの情動制御の発達に寄与する保育者の役割の重要性を指摘する。すなわち，ある子どもの他児との交流に直接的に関与できる保育者には，その子どもの自己制御の発達に対して，養育者とは異なる発達支援の機会を提供できることが示されている。しかしながら，森田（2004）の論考では，どのような関わりが有効であるのかは今後の検討課題であると述べられるに留まっている。

子どもの行動の改善を目標とする自己制御の視点に基づく支援策として，自己制御の力を直接的に向上させる 2 つの方法が有効であろうと考えられる。ひとつは，石崎（1995）による，多動児に対する運動の制御を介した多動性の抑制を目指す支援法[注 11] である。もうひとつは，認知的自己制御の向上を目指す支援法としての Tools of the Mind とよばれるプログラム（Bodrova & Leong，2006；Diamond, Barnett, Thomas, & Munro，2007）である。Tools of the Mind とは，人間の心的能力を拡張する心的道具のことであり，自己制御的な独り言（内言），劇遊び，記憶と注意を促進する補助具が活用される。これらの中でも，自己

注 11　石崎（1995）の支援法には，身体イメージを作る運動，静止する運動，待つ運動がある。身体イメージを作る運動では，身体の自由な動きを制限し，四肢に注意を向けさせる。静止する運動では，初めに大人の補助によって静止姿勢を保持し，徐々に大人の補助なしでの静止を目指す。そして，待つ運動では，大人の補助，あるいは，台や椅子などの補助によって，動き出すことを待たせる。これらの運動では，初めに大人の補助や道具の補助が提供され，徐々に補助の程度が軽減される。

制御的な独り言の機能は，Giesbrecht, Müller, & Miller（2010）の心理的距離化という概念と関連していると考えられる。

Giesbrecht et al.（2010）によると，心理的距離化とは，即座的な知覚世界から心理的に離れた表象空間を作ることであり，さらに，その機能は現在の衝動に抗した行動に起因する状況の制約から解放されることである。たとえば，子どもに対して母親が疑問文で話しかけることは，子どもがそれまでに考慮していなかった問題に対する注意を促す効果をもつために心理的距離化を促進する。さらに，母子の関与過程は自己制御の練習にとっての社会的足場として機能するという。自己制御的な独り言と類似していると推測する理由は，心理的距離化の過程で生起していることが，大人から問いかけられることによって，最適な回答を探すことによって刺激に対して直接的で優位な反応を抑える自己制御的な独り言と読み替えことができるのではないかと考えられるからである。心理的距離化の結果，情動制御が発達し（Giesbrecht et al.，2010），自己制御的な独り言の結果，実行機能が発達する（Diamond et al.，2007）。これらとは対照的に，服従を要求し，親の観点の採用を強制する親は，子どもが自分の考えを再検討する機会を与えないことになるという（Giesbrecht et al.，2010）。以上のことからも，幼児期における自己制御の発達において，母子相互作用の重要性は疑いようのないことであると考えられる。

運動の制御を介した支援法と Tools of the Mind プログラムは，それぞれ自己制御の reactive な側面から effortful な側面への発達に対応している。そして，この発達過程を母子相互作用の文脈からの発達としてとらえると，次のような発達過程が想定される：子どもの自己制御は，母子間の協応的な共同的関わりを基盤として，子どもが個としての能力を獲得していく過程において，母親からの多くの支持を必要とする reactive な自己制御から自律的に制御可能となる effortful な自己制御へと発達する。

第 5 節　母親に焦点を当てた子どもの社会性発達への支援

社会性の発達の問題では，機嫌の悪さと衝動性という難しい気質をもつ子どもは，安定した気質の子どもに比べて，養育環境の影響をより受けやすい。このことは，乳幼児期の子どもの健やかな発達を補償するために，発達初期からの支援を必要とする母子がいることを示しており，支援の視点として研究 1 と研究 2 の明らかにしたことが活用できると考えられる。その具体的な例として，愛着理論にもとづく以下の 2 つの支援技法がある。

ひとつは，安定型の愛着パターンが形成されていない母子，子育てに様々な苦悩を抱え

る母親，そして，行動や情動の制御不全を示す乳幼児を対象とする the Circle of Security（安全感の輪）という治療的介入である（Powell, Cooper, Hoffman, & Marvin，2008）。Figure 13 はこの介入の中核となる理論的背景を簡潔に表す図である。この図には，子どもは母親に何を求めているのかということ，そして，それに対応した安全基地と確実な避難所という役割を母親が提供することによって，子どもは外界への探索行動を行なうようになることが明示されている。この時期の子どもにとって，母親を安全基地および避難所として探索活動を行なうことは，健全な発達の重要な指標である。

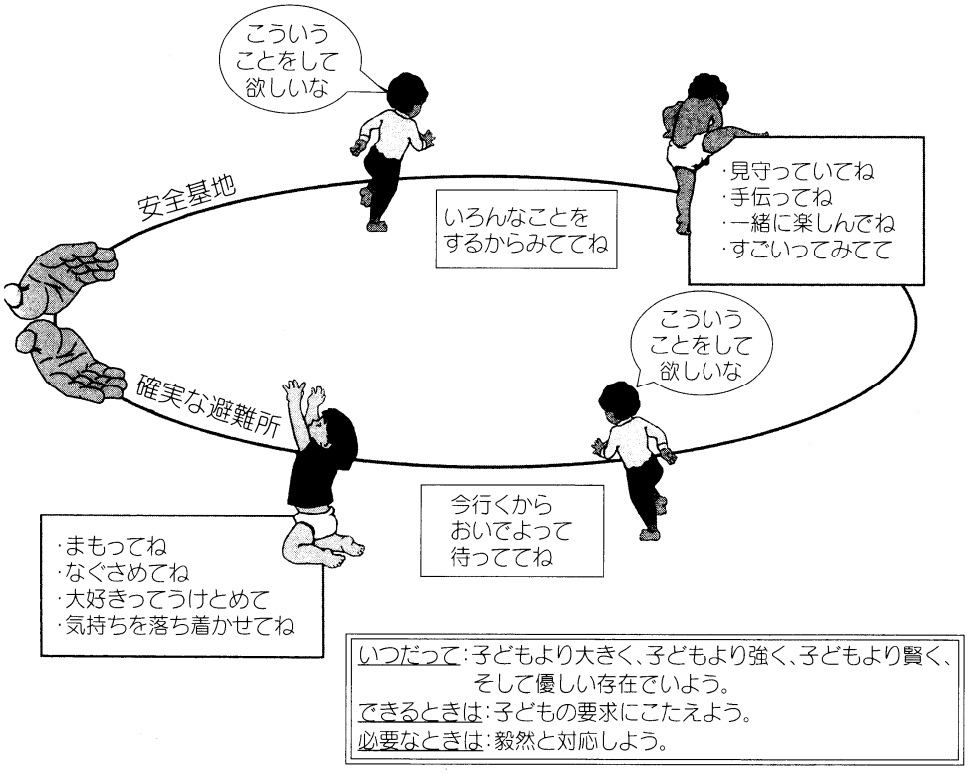


Figure 13. 安全感の輪

愛着理論にもとづくもうひとつの治療的介入は，Watch, Wait and Wonder プログラム（Cohen, Muir, Lojkasek, Muir, Parker, Barwick, & Brown，1999）とよばれるものである。このプログラムの対象は，情動制御や生活リズムの安定に問題を示す乳幼児と，抑うつ感や愛着形成の失敗感をもつ母親であった。このプログラムでは，母親に子どもの自発的行動をよく観察することを求め，子どもの要求に対してより感受性があり応答的であるように支援する。Cohen et al.（1999）によると，支援の結果，愛着パターンは安定化し，子どもの情動制御と認知発達に改善が見られた。これら 2 つの支援には，治療的介入の入り口

（Stern，1995）として相互作用水準を重視しているという共通点がある。このことが，支援の視点として研究 1 と研究 2 の明らかにしたことが活用できると考える根拠である。

これら 2 つの支援プログラムは，愛着形成において，母子相互作用がどのような様相を示すのかということに着目することの重要性を示している。この様相をさらに明確化するために，共同的関わりという微視的な視点からの検討が有効である。たとえば，Claussen, Mundy, Mallik, & Willoughby（2002）は，親以外の大人との相互作用場面における子どもの共同注意（この研究で用いられた測度は，共同的関わりを構成する行動と類似している）と愛着パターンとの関連を調べた。その結果，非体制型の子どもは体制型の子どもと比較して, 共同注意の能力が劣っていた。さらには, 乳児期の共同注意行動と幼児期の社会的, 行動的コンピテンスには正の相関があることを示した研究もある（van Hecke, Mundy, Françise, Block, Delgado, Parlade, Meyer, Neal, & Pomares，2007）。これらの結果は，共同注意の能力は，子どもの社会‐認知的発達を促進する社会的学習の機会に影響を与えるという主張（Adamson & Russell，1995）に，実証的根拠を与えた。

以上の議論から，愛着形成の基盤には共同的関わりという行動水準の母子相互作用があること，したがって，共同的関わりの視点による母子相互作用の分析は，子どもの発達の理解と支援のために極めて有効であると結論することができるであろう。この意味において，本研究が提起した結論は，安全感の輪の図と Trevarthen（1979）が示した結果（Figure 3B）に集約されているといえるであろう。

ここで留意すべきことは，母親の果たす役割の大きさである。安全感の輪の図が強調する母親の役割の重要性は，研究 1 と 2 の結果とも一致する。しかし，理論が描き出す理想的かつ完璧な役割を母親に求めてはいけないであろう。その根拠として，以下の 3 つの研究を挙げることができる。Tronick & Cohn（1989）は，母子相互作用においては，母親が子どもに応答的であるという調和状態から応答的ではない不調和状態へ頻繁に移行することを見つけた。そして，常に調和状態であることが重要なのではなく，調和状態から不調和状態へ，そして再び調和状態へ戻ることの理解が重要であると主張した。さらに，Field, Healy, Goldstein, Perry, Schanberg, Zimmerman, & Kuhn（1988）は，わずか 6 か月未満の乳児が，対面状況で関わる大人のはたらきかけ方や応答性の質を変化させることを明らかにした。この結果は，母子双方が相互作用の質を決める役割をもっているということを意味している。そして, 生得的な子どもの気質が養育行動に与える影響が Sameroff & Fiese（2000）の相乗的相互作用モデルに示されている。

母親の役割の重要性を強調することは，子どもの発達的未熟さを考慮したとき当然のことである。しかしながら，非臨床群の母子にも不安定型の愛着パターンが多数存在し，愛着理論の基準からみたとき，それらのパターンに該当する母親の応答性は適切なものではない（Ainsworth et al.，1978）。そして，研究 2 は，非臨床群の母子において，子どもの社会性発達にとって理論的には不適切であると予測される様々な位置取りがあることを示した。これらの結果は，母親の関わり方や役割は多様なものであり，一律的な基準によって適切か不適切かを評価してはならないということを示唆していると考えられる。

第 6 節　本研究の意義と課題

本研究の意義は，乳児期における共同的関わりの発達が，その後の母子関係や子どもの社会性の発達につながることを実証的データと先行研究の概観によって示したことであろう。そのことによって，臨床的な問題を呈する母子を発達心理学的に評価する視点，理論的に推奨されるべき支援方法，そして，支援目標とする母子の特徴を提起することができた。

方法論の観点においても，本研究の意義はあると考えられる。二者関係における表象内容を言語的に得ることのできない対象の場合，行動と主観的表象の一致を確認することはできない。そして，検証可能なデータは行動水準においてしか得ることができない。しかし，主観的表象を活用しない場合であっても，相互作用の特徴である双方向性を正確に測定することによって，臨床心理学的問題を抱えた母子に対する支援に貢献できることを，本研究は示した。さらに，本研究の定量的なデータから明らかになった事実は，発達臨床の現場で求められる基準，すなわち，現在の子どもの発達状況が定型的であるかどうかの評価, そして, 発達的帰結の予測にもとづく支援の必要性と方法の提示（本郷・金谷, 2011）にもつながるであろう。

得られたデータから未知の現象を予測することは，実証的研究の最大の目的である（高野・岡，2004）。一方，鯨岡（1999）の関係発達論は，母子関係の機微にまで迫る理解を目的としている。ここに相互作用研究と関係発達論との相違がある。しかしながら，これら 2 つの立場は対立するものではないであろう。発達臨床において，対象者を共感的に理解することは支援の基本的原則である。その理解は，実証的根拠を伴わないものであってはならない。母子関係を理解するための基盤は，相互作用の正確な記述であろう。この意味において，本研究が提示した結果は発達臨床心理学的に有用であると考えられる。

本研究には 3 つの限界がある。ひとつは, 条件付き確率にもとづく事象の読み取り（Table 3，4）の限界である。Schaffer（1984）によると，この方法について次の 2 つの問題点が指摘されている：（1）ある反応が直前の反応によって引き起こされたという保証はなく，行動系列中のもっと以前に生起した行動によって引き起こされたかもしれないということが看過される，（2）行動は単一事象によって決定されるとの仮定がある。すなわち，特定の行動系列の形態を説明するかもしれない個人の意図や長期的目標という側面が看過される。Schaffer（1984）は，この限界を克服するために，lag sequential analysis（Sackett，1979）を推奨している。しかし, この方法にも, 結果の分析が断片的であるとの批判があり（Bakeman & Quera，2011），さらに，多数の観察単位を要する分析であり，決定的な解決法とは言えないようである。分析方法以外の対策として，先行事象の生起を実験的に操作する方法の導入が考えられる。この方法によって，行動間の関連をより確実にすることができるであろう。

第 2 の限界は，Schaffer（1984）の指摘（2）とも関連している。本研究では，母子間の行動水準のやりとりだけを検討の対象とし，情動の問題を扱っていない。子どもの情動を制御することは，母子間の相互的制御システムの主要な役割である。自己制御の領域においても，情動制御（Eisenberg, Smith, Sadovsky, & Spinrad，2004）および認知的制御との関連（Carlson & Wang，2007）は重要な研究課題である。共同注意の発達においても，情動の役割は大きい。情動は個人内で生起する過程ではなく，2 者間のやりとりにおいて生起し，相互に制御し合う機能を持っているからである（Cole, Martin, & Dennis，2004）。そして，母子における共同注意は，まさにそのような相互作用場面にほかならない（東谷・大藪，2005）。社会化過程を実証的に明らかにするとき，情動制御の変数を組み入れることによって，母子相互作用のより包括的な理解に到達することができる。

第 3 の限界は，共同的関わりによって示される母子相互作用の特徴が，幼児期における子どもの発達的帰結である自己制御とどのように関連しているかについて，実証的なデータを示していないことである。すなわち，Figure 1 に示された自己制御課題の成績のばらつきを説明する変数を，実証的データによって示すことができていない。気質研究の領域においては, 近年, 情動反応性との関連が検討されている（Putnam & Stifter，2005；Ursache et al.，2013）。共同的関わりと共制御と自己制御との関連を，縦断研究によって解明することが，本研究に残された大きな課題である。

引用文献

Adamson, L. B. (1996). *Communication development during infancy*. Boulder: Westview Press.（大藪泰・田中みどり（訳），（1999）． 乳児のコミュニケーション発達：ことばが獲得されるまで　川島書店）

Adamson, L. B., Bakeman, R., & Deckner, D. F. (2004). The development of symbol-infused joint engagement. *Child Development*, **75**, 1171-1187.

Adamson, L. B., & Russell, C. L. (1999). Emotion regulation and the emergence of joint attention. In P. Rochat (Ed.), *Early social cognition: Understanding others in the first months of life*. London: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 281-297.

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Ayduk, O., Mendoza-Denton, R., Mischel, W., & Downey, G. (2000). Regulating the interpersonal self: Strategic self-regulation for coping with rejection sensitivity. *Journal of personality and Social Psychology*, **79**, 776-792.

Bakeman, R.,, & Adamson, L. B. (1984). Coordinated attention to people and objects in mother-infant and peer-infant interaction. *Child Development*, **75**, 1171-1187.

Bakeman, R., & Gottman, J. M. (1997). *An introduction to sequential analysis (2nd ed.)*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bakeman, R., & Quera, V. (2001). *Sequential analysis and observational methods for the behavioral science*. Cambridge: Cambridge University Press.

Baron-Cohen, S., Baldwin, D. A., & Crowson, M. (1997). Do children with autism use the speaker's direction of gaze strategy to crack the code of language? *Child Development*, **68**, 48-57.

Bigelow, A. E., MacLean, K., & Proctor, J. (2004). The role of joint attention in the development of infants' play with objects. *Developmental Science*, **7**, 518-526.

Biringen, Z. (2000). Emotional availability: Conceptualization and research findings. *American Journal of Orthopsychiatry*, **70**, 104-114.

Bodrova, E., & Leong, D. J. (2006). *Tools of the Mind: The Vygotskian approach to early childhood education* (2th ed.). Columbus: Prentice Hall.

Bowlby, J. (1988). *A secure base: Clinical applications of attachment theory.* London: Routledge.（仁木武 （監訳），（1993）． 母と子のアタッチメント：心の安全基地 医歯薬出版）

Brooks, R., & Meltzoff, A. N. (2002). The importance of eyes: How infants interpret adult looking behavior. *Developmental Psychology*, **38**. 958-966.

Butterworth, G., & Jarrett, N. (1991). What minds have in common is space: Spatial mechanisms serving joint visual attention in infancy. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 55-72.

Carlson, S. M., & Wang, T. S. (2007). Inhibitory control and emotion regulation in preschool children. *Cognitive Development*, **22**, 489-510.

Carpenter, M., Nagell, K., & Tomasello, M. (1998). Social cognition, joint attention, and communicative competence from 9 to 15 months of age. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **63**.

Cerezo, M., & D'Ocon, A. (1995). Sequential analyses in coercive mother-child interaction: The predictability hypothesis in abusive versus nonabusive dyads. *Child Abuse & Neglect*, **23**, 99-113.

Claussen, A. H., Mundy, P. C., Mallik, S. A., & Willoughby, J. C.（2002）. Joint attention and disorganized attachment status in infants at risk. *Development and Psychopathology*, **14**, 279-291.

Cohen, N. J., Muir, E., Lojkasek, M., Muir, R., Parker, C. J., Barwick, M., & Brown, M. (1999). Watch, wait, and wonder: Testing the effectiveness of a new approach to mother-infant psychotherapy. *Infant Mental Health Journal*, **20**, 429-451.

Cole, P., Martin, S. E., & Dennis, T. A. (2004). Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development*, **75**, 317-333.

Conway, A., & Stifter, C. A. (2012). Longitudinal antecedents of executive function in preschoolers. *Child Development*, **83**, 1022-1036.

Crittenden, P. M. (1992). Children's strategies for coping with adverse home environments: An interpretation using attachment theory. *Child Abuse & Neglect*, **16,** 329-343.

Crowell, J. A., Feldman,S. S., & Ginsberg, N. (1988). Assessment of mother-child interaction in preschooler with behavior problem. *Journal of the American Academy of Child Adolescent Psychiatry*, **27**, 303-311.

Diamond, A., Barnett, W. S., Thomas, J., & Munro, S. (2007). Preschool program improves cognitive control. *Science*, **318**, 1387-1388.

Dunham, P., & Dunham, F. (1990). Effects of mother-infant social interactions on infants' subsequent contingency task performance. *Child Development*, **61**, 785-793.

Dunham, P. J., & Dunham, F. (1995). Optimal social structures and adaptive infant development. In C. Moore & P. J. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 159-188. （大神英裕（監訳），（1999）．ジョイント・アテンション：心の起源とその発達を探る　ナカニシヤ出版）

van Egeren, L. A., Barratt, M. S., & Roach, M. A. (2001). Mother-infant responsiveness: Timing, mutual regulation, and interactional context. *Developmental Psychology*, **37**, 684-679.

Eisenberg, N., Cumberland, A., Spinrad, T. L., Fabes, R. A., Shepard, S. A., Reiser, M., Murhy, B. C., Losoya, S. H., & Guthrie, I. K. (2001). The relation of regulation and emotionality to children's externalizing and internalizing problem behavior. *Child Development*, **72**, 1112-1134.

Eisenberg, N., Eggum, N. D., Sallquist, J., & Edwards, A. (2010). Relations of self-regulatory/control capacities to maladjustment, social competence, and emotionality. In R. H. Hoyle (Ed.), *Handbook of personality and self-regulation*. Malden: Wiley-Blackwell. pp. 21-46.

Eisenberg, N., Fabes, R. A., Shepard, S. A., Murphy, B. C., Guthrie, I. K., Jones, S., Friedman, J., Poulin, R., & Maszk, P. (1997). Contemporaneous and longitudinal prediction of children's social functioning from regulation and emotionality. *Child Development*, **68**, 642-664.

Eisenberg, N., Smith, C. L., Sadovsky, A., & Spinrad, T. L. (2004). Effortful control: Relations with emotion regulation, adjustment, and socialization in chikdhood. In R. F. Baumeister, & K. D. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation: Research, theory, and applications*. New York: Guilford Press. pp. 259-282.

Emde, R. N. (1992). *Amae*, intimacy, and the early moral self. *Infant Mental Health Journal*, **13**, 34-42.

Emde, R. N., & Sameroff, A. J. (1989). Understanding early relationship disturbances. In A. J. Sameroff, & R. N. Emde (Eds.), *Relationship disturbances in early childhood*. New York: Basic Books. pp. 3-14.

遠藤利彦・小沢哲史 (2001). 乳幼児期における社会的参照の発達的意味およびその発達プ

ロセスに関する理論的検討　心理学研究, **71**, 498-514.

Feldman, R., Grennbaum, C. W., & Yirmiya, N. (1999). Mother-infant affect synchrony as an antecedent of the emergence of self-control. *Developmental Psychology*, **35**, 223-231.

Field, T., Healy, B., Goldstein, S., Perry, S., Schanberg, S., Zimmerman,E. A., & Kuhn C. (1988). Infants of depressed mothers show “depressed” behavior even with nondepressed adults. *Child Development*, **59**, 1569-1579.

Fogel, A., Nwokah, E., Hsu, H., Dedo, J. Y., & Walker, H. (1993). Posture and communication in mother-infant interaction. In G. J. P. Savelsbergh (Ed.), *The development of coordination in infancy. Amsterdam*: North-Holland. pp. 395-422.

藤崎春代・木原久美子 (2010). 「気になる」子どもの保育　ミネルヴァ書房

Giesbrecht, G. F., Müller, U., & Miller, M. R. (2010). Psychological distancing in the development of executive function and emotion regulation. In B. W. Sokol, U. Müller, J. I. M. Carpendale, A. R. Young, & G. Iarocci (Eds.), *Self and social regulation: Social interaction and the development of social understanding and executive functions*. New York, NY: Oxford University Press. pp. 337-357.

Goldsmith, D. F., & Rogoff, B. (1997). Mothers’ and toddlers’ coordinated joint focus of attention: Variations with maternal dysphoric symptoms. *Developmental Psychology*, **33**, 113-119.

Harrist, A. W., & Waugh R. M. (2002). Dyadic synchrony: Its structure and function in children’s development. *Developmental Review*, **22**, 555-592.

Hart, S., Field, T., & del Valle, C. (1998). Depressed mothers’ interaction with their one-year-old infants. *Infant Behavior & Development*, **21**, 519-525.

van Hecke, A. V., Mundy, P. C., Françise, C., Block, A. J. J., Delgado, C. E. F., Parlade, M. V., Meyer, J. A., Neal, A. R., & Pomares, Y. B. (2007). Infant joint attention, temperament, and social competence in preschool children. *Child Development*, **78**, 53-69.

東谷佐知子・大藪泰 (2005). 母子の共同注意と子どもの情動調整　小児保健研究, **6**, 760-768.

本郷一夫・金谷京子 (2011). 臨床発達心理学の基礎　ミネルヴァ書房

石崎朝世 (1995). 落ち着きのない子どもたちー多動症候群への理解と対応ー　鈴木出版

Kagan J., Reznick, J. S., & Snidman, N. (1988). Biological bases of childhood shyness. *Science*, **240**, 167-171.

Kochanska, G., Coy, K. C., & Murray, K. (2001). The development of self-regulation in the first four years of life. *Child Development*, **72**, 1091-1111.

Kochanska, G., Forman, D. R., Aksan, N., & Dunbar, S. B. (2005). Pathways to conscience: Early mother-child mutually responsive orientation and children's moral emotion, conduct, and cognition. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **46**, 19-34.

Kochanska, G., & Knaack, A. (2003). Effortful control as a personality characteristic of young children: Antecedents, correlates, and consequences. *Journal of Personality*, **71**, 1087-1112.

Kochanska, G., Murray, K. T., & Harlan, E. T. (2000). Effortful control in early childhood: Continuity and change, antecedents, and implications for social development. *Developmental Psychology*, **36**, 220-232.

Kopp, C. B. (1982). Antecedents of self-regulation: A developmental perspective. *Developmental Psychology*, **18**, 199-214.

輿石薫 (2002). 母子相互交渉の質と母親の育児不安及び子どもの言語発達との関連性について　小児保健研究，**61**，584-592.

久保ゆかり (2010). 幼児期における情動調整の発達ー変化，個人差，および発達の現場を捉えるー　心理学評論, **53**, 6-19.

鯨岡峻 (1999). 関係発達論の構築：間主観的アプローチによる　ミネルヴァ書房

Liew, J. (2012). Effortful control, executive functions, and education: Bringing self-regulatory and social-emotional competencies to the table. *Child Development Perspectives*, **6**, 105-111.

Madigan, S., Hawkins, E., Goldberg, S., & Benoit, D. (2006). Reduction of disrupted caregiver behavior using modified interaction guidance. *Infant Mental Health Journal*, **27**, 509-527.

Maestro, S., Muratori, F., Cavallaro, M. C., Pecini, C., Cesari, A., Paziente, A., Stern, D., Golse, B., & Palacio-Espasa, F. (2005). How young children treat objects and people: An empirical study of the first year of life in autism. *Child Psychiatry and Human Development*, **35**, 383-396.

McCabe, L. A., M. Cunnington, & J. Brooks-Gunn. (2004). The development of self-regulation in young children. In R. F. Baumeister & K. D. Vohs (Eds.), *Handbook of self-regulation: Research, theory, and applications*. New York: Guilford Press. pp. 340-356.

Mesman, J., Stoel, R., Bakemans-Kranenburg, M. J., van IJzendoorn, M. H., Juffer, F., Koot, H. M., & Alink, L. R. A. (2009). Predicting growth curves of early childhood externalizing problems: Differential susceptibility of children with difficult temperament. *Journal of Abnormal Child*

Psychology, **37**, 625-636.

Mezzacappa, E., Kindlon, D., & Earls, F. (1999). Relations of age to cognitive and motivational elements of impulse control in boys with and without externalizing behavior problems. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **24**, 473-48.

Milner, J. S. (2003). Social information processing in high-risk and physically abusive parents. *Child Abuse & Neglect*, **27**, 7-20.

森口佑介 (2012). わたしを律する私　京都大学出版会

森田祥子 (2004). 乳幼児期の情動調整の発達に関する研究の概観と展望－保育の場を視野に入れた情動調整の発達の理解を目指して－　東京大学大学院教育学研究科紀要, **44**, 181-189.

Mulphurs, J. E., Field, T. M., Larraine, C., Pickens, J., Pelaez-Nogueras, M., Yando, R., & Bendell, D. (1996). Altering withdrawn and intrusive interaction behaviors of depressed mothers. *Infant Mental Health Journal*, **17**, 152-160.

則内まどか・青木豊・菊池吉晃・里村恵子 (2004). 育児困難感をもつ親と乳幼児の注意の共有－おもちゃ遊び場面における親の行動傾向－ 小児保健研究, **63**, 653-659.

岡本夏木 (1982). 子どもとことば　岩波書店

岡本依子 (2000). マイクロ分析　田島信元・西野泰広（編），発達研究の技法　福村出版 pp.175-179.

Olson, S. L., Sameroff, A. J., Kerr, D. C., Lopez, N. L., & Wellman, H. M. (2005). Developmental foundations of externalizing problems in young children: The role of effortful control. *Development and Psychopathology*, **17**, 25-45.

大内晶子・長尾仁美・櫻井茂男 (2005). 幼児の自己制御機能尺度の検討－社会的スキル・問題行動との関係を中心に－　教育心理学研究, **56**, 414-425.

大藪泰 (2004). 共同注意：新生児から 2 歳 6 か月までの発達過程　川島書店

Pellegrini, A. (1996). *Observing children in their natural worlds: A methodological primer*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.（大藪泰・越川房子（訳），(2000)．子どもの行動観察法：日常生活場面での実践　川島書店）

Pentlant, A. (2008). *Honest signals: How they shape our world*. MIT Press: Cambridge.（柴田裕之（訳），(2013)．正直シグナル：非言語コミュニケーションの科学　みずず書房）

Pomerleau, A., Scuccimarri, C., & Malcuit, G. (2003). Mother-infant behavioral interactions in

teenage and adult mothers during the first six months postpartum: Relations with infant development. *Infant Mental Health Journal*, **24**, 498-509.

Posner, M. I., & Rothbart, M. K. (2006). *Educating the human brain.* APA. （無藤隆（監修），近藤隆文（訳）（2012）．脳を教育する　青灯社）

Powell, P., Cooper, G., Hoffman, K., & Marvin, R. (2008). The circle of security project: A case study: “It hurts to give that which you did not receive”. In D. Oppenheim, & D. F. Goldsmith (Eds.), *Attachment theory in clinical work with children: Bridging the gap between research and practice*. New York: Guilford Press. pp. 172-202. （数井みゆき・北川恵・工藤晋平・青木豊（訳）（2011）．アタッチメントを応用した養育者と子どもの臨床　ミネルヴァ書房）

Prior, V., & Glaser, D. (2006). *Understanding attachment and attachment disorders: Theory, evidence and practice*. London: Jessica Kingsley.（加藤和生（監訳），（2008）．愛着と愛着障害　北大路書房）

Putnam, S., & Stifter, C. (2005). Behavioral approach-inhibition in toddlers: Prediction from infancy, positive and negative affective components, and relations with behavior problems. *Child Development*, **76**, 212-226.

Raver, C. C. (1996). Relations between social contingency in mother-child interaction and 2-year-olds’ social competence. *Developmental Psychology*, **32**, 850-859.

Rosenblum, K. L. (2004). Defining infant mental health. In A. J. Sameroff, S. C. McDonough, & K. L. Rosenblum (Eds.), *Treating parent-infant relationship problems*. New York: Guilford Press. pp. 43-75.

Rothbart, M., & Bates, J. E. (2006). Temperament. In N. Eisenberg, W. Damon, & R. M. Lerner (Eds.), *Handbook of child psychology: vol. 3. Social, emotional, and personality development* (6th ed.). Hoboken: Wiley. pp. 99-166.

Sackett, G. P. (1979). The lag sequential analysis of contingency and cyclicity in behavioral interaction research. In J. D. Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development*. New York: John Wiley & Sons. pp. 623-649.

Sameroff, A. J, & Fiese, B. H. (2000). Models of development and developmental task. In C. H. Zeanah (Ed.), *Handbook of infant mental health* (2nd. ed.). New York: Guilford Press. pp. 3-19.

Scaife, M., & Bruner, J. S. (1975). The capacity for joint visual attention in the infant. *Nature*, **253**, 265-266.

Schaffer, H. R. (1984). *The child's entry into a social world*. London: Academic Press.

Schaffer, H. R. (1999). Understanding socialization: From unidirectional to bidirectional conceptions. In M. Bennett (Ed.). *Developmental psychology: Achievements and prospects*. London: Psychology Press. pp. 272-288.

千住淳 (2012). 社会脳の発達　東京大学出版会

Shaffer, D. R. (2008). *Social and personality development* (6th ed.). Belmont: Wadsworth.

清水光弘 (2007). 2 組の母子における共同的関わりの縦断的マイクロ分析　川崎医療福祉学会誌, **17**, 87-95.

清水光弘 (2008a). 母子における共同的関わりの縦断的マイクロ分析－遊び場面における視線行動と身振り行動を中心に－　日本発達心理学会第 19 回発表論文集, 293.

清水光弘 (2008b). 母子における共同的関わりの縦断的観察－注視行動と身振り行動のマイクロ分析－　小児保健研究, 67, 867-872.

清水光弘 (2009). 母子の位置取りおよび相互応答性と母親の関わり方との関連　中国四国心理学会論文集, **42**, 32.

清水光弘 (2011). 遊び場面における母子の位置取りと母子の行動との関連　小児保健研究, **70**, 652-657.

清水光弘 (2012a). 幼児期における Effortful Control と実行機能の発達　第 76 回日本心理学会発表論文集, 977.

清水光弘 (2012b). 幼児期における社会適応のつまずきへの支援－自己制御の観点からの考察－　川崎医療福祉大学附属心理・教育相談室年報, **7**, 1-8.

清水光弘・金光義弘 (2005). 共同的関わりの視点による母子相互作用の分析　川崎医療福祉学会誌, **15**, 237-241.

清水光弘・武井裕子・金光義弘 (2004). 共同的関わりの視点による母子間の反応調和性の分析　中国四国心理学会論文集, **37**, 28.

清水光弘･田上奈津子 (2006). 母親－乳児相互作用における母子の役割の発達　第 53 回日本小児保健学会講演集, 344-345.

清水光弘・田上奈津子・金光義弘 (2007).　2 組の母子における共同的関わりの縦断的マイクロ分析－視線行動と身振り行動の応答に関する分析－, 中国四国心理学会論文集, **40**, 18.

Spinrad, T. L., Eisenberg, N., Silva, K. M., Eggum, N. D. Reiser, M., Edwards, A., Iyer, R., Kupfer,

A. S., Hofer, C., Smith, C., L., Hayashi, A., & Gaertner, B. M. (2012). Longitudinal relations among maternal behaviors, effortful control and young children's committed compliance. *Developmental Psychology*, **48**, 552-566.

Sroufe, L. A. (1989). Relationships and relationship disturbances. In A. J. Sameroff, & R. N. Emde (Eds.), *Relationship disturbances in early childhood*. New York: Basic Books. pp. 97-124.

Stern, D. N.(1971). A micro-analysis of mother-infant interaction: Behavior regulating social contact between a mother and her $3^1/_2$-month-old twins. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*. **10**, 501-517.

Stern, D. N. (1985). *The interpersonal world of the infant*. New York: Basic Books. （小此木啓吾・丸太俊彦（監訳），（1989）．乳児の対人世界　岩崎学術出版社)

Stern, D. N. (1995). *The motherhood constellation: A unified view of parent-infant psychotherapy*. New York: Basic Books.（馬場禮子・青木紀久代（訳），（2000）．親－乳幼児心理療法：母性のコンステレーション　岩崎学術出版社）

Stern-Bruschweiler, N., & Stern, D. N. (1989). A model for conceptualizing the role of the mother's representational world in various mother-infant therapies. *Infant Mental Health Journal*, **10**, 142-156.

菅原ますみ (2003). 個性はどう育つか　大修館書店

菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島悟・佐藤達哉・向井隆代 (1999). 子どもの問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から　発達心理学研究, **10**, 32-45.

高野陽太郎・岡隆　(2004). 心理学研究法：心を見つめる科学のまなざし　有斐閣

Tomasello, M. (1995). Joint attention as social cognition. In C. Moore, & P. J. Dunham (Eds.), *Joint attention: Its origins and role in development*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 103-130. （大神英裕（監訳），（1999）．ジョイント・アテンション：心の起源とその発達を探る　ナカニシヤ出版）

Tomasello, M. (1999). *The cultural origin of human cognition*. Cambridge: Harvard University Press.

Trevarthen, C. (1979). Communication and cooperation in early infancy: A description of primary intersubjectivity. In M. Bullowa (Ed.). *Before speech*. New York: Cambridge University Press. pp. 321-347.

Tronick, E. Z., & Cohn, J. F. (1989). Infant-mother face-to-face interaction：Age and gender differences in coordination and the occurrence of miscoordination. *Child Development*, **60**, 85-92.

Ursache, A., Blair, C., Stifter, C., & Voegtline, K. (2013). Emotional reactivity and regulation in infancy interact to predict executive functioning in early childhood. *Developmental Psychology*, **49**, 127-137.

Walden, T. A. (1991). Infant social referencing. In J. Gerber, & K. Dodge (Eds.), *The development of emotion regulation and dysregulation*, Cambridge: Cambridge University Press. pp. 69-88.

Wallin, D. J. (2007). *Attachment in psychotherapy*. New York: Guilford Press. （津島豊美（訳），（2011）．愛着と精神療法　星和書店）

渡辺久子 (1989). 母ー乳幼児治療 2　小此木啓吾・渡辺久子（編），乳幼児精神医学への招待　ミネルヴァ書房　pp. 164-178.

Weinfield, N. S., Sroufe, L. A., Egeland, B., & Carlson E. A. (1999). The nature of individual differences in infant-caregiver attachment. In J. Cassidy, & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. New York: Guilford Press. pp. 68-88.

White, L. K., McDermott, J. M., Degnan, K. A., Henderson, H. A., & Fox, N. A. (2011). Behavioral inhibition and anxiety: The moderating roles of inhibitory control and attention shifting. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **39**, 735-747.

Williams, L. R., Degnan, K. A., Perez-Edgar, K. E., Henderson, H. A., Rubin, K. H., Pine, D. S., Steinberg, L., & Fox, N. A. (2009). Impact of behavioral inhibition and parenting style on internalization and externalization problems from early childhood through adolescence. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **37**, 1063-1075.

Wood, D., Bruner, J. S., & Ross, G. (1976). The role of tutoring in problem solving. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **17**, 89-100.

Woodward, A. L. (2005). Infants' understanding of the actions involved in joint attention. In N.Eilan, C. Hoerl, T. McCormack, & J. Roessler (Eds.), *Joint attention: Communication and other minds*. Oxford: Clarendon Press. pp. 110-128.

やまだようこ (2005). 共に見ること語ること：並ぶ関係と三項関係　北山修（編），共視論：母子像の心理学　講談社　pp. 73-87.

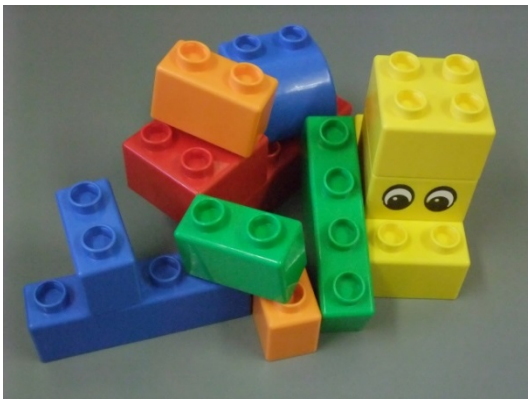
van Zeijl, J., Mesman, J., Stolk, M. N., Alink, R. A., van IJzendoorn, M. H.,

Bakermans-Kranenburg, M. J., Juffer, F., & Koot, H. M. (2007). Differential susuceptibility to discipline: The moderating effect of child temperament on the association between maternal discipline and early childhood externalizing problems. *Journal of Family Psychology*, **21**, 623-636.

付録

研究 1 の観察 2 と観察 3 において用いられた玩具の写真を下に示す。

（a）ままごとセット

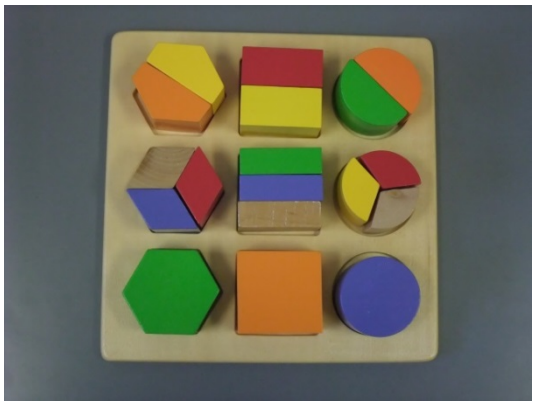


（b）幼児用ブロック

（c）つまみを押す/回すと音が出る玩具

（d）形合わせ

（e）お絵かきボード



（f）形構成ブロック

謝　辞

最終稿を提出し，このような稚拙な論文しか書けなかったという忸怩たる思いが募ります。論文の完成に向けて，金光義弘先生，永田博先生，そして，保野孝弘先生には，終始丁寧なご指導を賜りました。そのことに対して深く深く感謝申し上げます。同時に，ご指導に見合う内容にならなかったことに対して，深く深くお詫び申し上げます。

滋賀県の障害児早期療育教室，児童相談所，小児保健医療センターにおける 18 年にわたる心理士としての勤務を経て，平成 15 年に川崎医療福祉大学に着任しました。この論文の内容は, 大学で勤務していた 10 年間で実施した研究にもとづくものですが, 書き終えた今, 滋賀県での経験が研究の契機と内容に大きく影響していることを強く感じています。結論として得たことは，結局のところ，現場での相談業務において考え，答えを探していたことであると気づきました。さらには，学生時代に学んだことを再確認する作業でもあり，執筆しながら，お世話になった先生方や先輩方のお顔を思い出していました。長きに亘る学びをまとめる機会となった大学での 10 年間に感謝です。

このような貴重な体験のきっかけを与えてくださったのは金光先生です。先生との出会いは，私が岡山大学の 3 年生のときにまで遡ります。それ以降，現在に至るまで途切れることなく薫陶を受けるという幸運を得て，公私にわたって，ことばでは表現し尽すことができないほどの御恩をいただいています。先生との出会いがなければ，私の人生はまったく異なったものになっていたでしょう。改めて心から深謝申し上げます。長年の指導の結果がこれか，とのお叱りは甘受せざるを得ません。

永田先生とのご縁も浅からぬものを感じます。先生は，私が 1 年生のときに助手をしておられました。先生は岡大の卒業生であり，当時，雲の上の先輩という存在でした。長い空白期間の後，本学で同じ教員として再会することになりました。先生には，本論文の観察 2 の元になっている論文の作成時に，多くのことをご教示いただきました。研究の厳しさをいつも教えてくださる，今も雲の上の先輩です。心理学との出会いのときに指導してくださったお二人の先生から，私の人生のまとめとも言える（何とも浅薄な人生ですが）論文を指導していただくことができ，有難く嬉しく思っています。

保野先生には，学科長の激務をお持ちにもかかわらず，丁寧なご指導を賜りました。さらに，論文執筆が滞りなく進むようにと，学科内業務についての配慮もしていただきました。ありがとうございました。

末筆ながら，安藤正人先生からいただいた多大なる学恩への感謝も申し上げます。研究を遂行するとき，継時データの分析を理解する必要がありました。安藤先生からご教示いただくたびに，無知の霧が次々と晴れていきました。ほんとうに楽しい時間でした。

最後に，観察に協力してくださった保育園，幼稚園，児童館の先生方，保護者の方々，子ども達，そして，記録の整理を手伝ってくれたゼミ生のみなさんに衷心からお礼を申し上げます。たくさんの出会いが懐かしい記憶として心に残っています。

このような論文が博士の学位に相当するのかという疑念が，私の心から消え去ることはないでしょう。しかし，自分の知りたいことに確かに触れることができたという満足感はあります。そのことを自分への慰めとし，残り少ない研究生活の糧とします。

平成 26 年 1 月

清水光弘